

童角力

(わっぱずもう)

ヨコテ

夏の盛りが過ぎ、秋の収穫が終わると、城下は祭り気分に包まれる。近くはもとより、遠くからも多くの人々が一年の労を癒すかのように集い、浮かれる。祭りの最大の行事は何といても童角力だ。古くから伝わる神事で、以前は神社で執り行われていたが、神社の境内では見物人が入りきらなくなったために、三年前から城郭の一角に場所が替わった。十二歳以下であれば百姓の子供も出場できるので、力自慢の百姓の子供はここぞとばかりに熱が入る。日頃威張り腐っている武家の子供を投げ飛ばして憂さを晴らせる上に、褒美までもらえるのである。以前は有力家臣による不正もあったようだが、この数年は殿の御前で公明正大に行われるようになり、武家の子供はあまり出場しなくなった。褒美は欲しいが名も惜しい。出場して恥を搔くくらいなら、百姓や町人のための催しだと割り切る風潮が武家の中には少なからずあった。

今年も城郭の一角に設えられた土俵の周りには、出場する童力士の親や親族、応援の村人、城下の町人や侍など、大勢の見物人が集まっていた。方々の村から参加するので、いきおい村を代表するような形になり、隣村には負けるな、などと大人たちの無責任が野次が飛び交っている。ただの角力好き、祭り好きで、勝ち負けとは関係なく酒を呑んでいる者もいる。たいていは体の大きい方が勝つ。勝敗が決すると大きな歓声と溜め息が漏れる。たまに小兵が投げ勝ったりすると、見物人たちから地鳴りのような歓声が沸いた。良民は皆、判官鼻眞である。自分のことのように、胸のすく思いで喜んだ。

取り組みが進む頃、黒谷村の堀田重吾は城門を目指して焦っていた。角力の手解きをした、近所に住む百姓の倅が出るので応援に来たのだが、妻への土産の筆を買っているうちに遅くなってしまった。妻のお静は近所の子供を相手に文字を教えている。筆は生け垣の補修を頼まれていたのに童角力へ来てしまったことへの詫びの品だった。

重吾が手解きをした百姓の倅は正吉といい、去年はただのひとりにも勝てなかった。よほど悔しかったとみえ、今年、雪辱を果たすべく重吾を頼ってきた。武芸に通じていて、偉丈夫の重吾が強そうに見えたのだろう。重吾は正吉の熱意に絆され、引き受けた。角力は見様見真似で覚えただけに過ぎないが、童角力なら教えられそうだと思う。

角力の稽古は畑仕事が終わったあと、重吾の家の前庭で行われた。躰は疲れていたが、重吾には嬉しいひとときだった。そういったことでもなければ近所の子供と触れ合えなかつたろう。

正吉の躰はこの一年でずいぶん変わった。相変わらずの痩せっぽちだったが、上背が伸びた。同じ年頃の子よりも手足が長い。この躰ならひとつやふたつは勝てそう。流れ出る汗を拭いながら、重吾は嬉しく、充足を感じたものだった。重吾と妻のお静の間に子はいなかった。慶吾という名の子がひとりいたが、二歳のときに病で死んでいる。生きていれば正吉と同じ、今年十一歳になっているはずだった。

城門をくぐると、角力が行われている方角から喚声が聞こえ、重吾の足はさらに速くなった。

やがて前方に、うごめく人の頭が見えてきた。筵敷きに座る見物人の顔はどれも屈託がなく、童角力を愉しんでいる。皆がこの一年の無事に感謝している。またこの一年、戦がなかった。戦がなければ畑仕事に励むことができ、収穫が上がる。こうやってのんびりと酒を酌み交わしながら角力見物ができるのも、殿の為政のお陰だと皆が口にする。殿は治水や開墾にも力を入れていて、名君の誉れが高い。近隣諸国にも殿の名声は知られるようになり、新たな土地を開墾するために流れてくる者は多い。重吾もそのひとりで、主君が滅びたのを機に二年前、仲間たちとともに黒谷村に移ってきた。百姓の暮らしには慣れても、去年までは村人と上手くうち解けられたとはいえなかった。よそ者という意識が村人にあり、重吾たちも気兼ねがあった。しかし、正吉との角力の稽古を他の子供や大人が見に来たりして、交流は次第に深まっていった。

殿の姿が土俵正面の棧敷に見える。周りを重臣たちに囲まれ、真剣な眼差しで土俵の取り組みをご覧になっている。その面差しは穏やかで、苛烈だった先の殿とは似ても似つかないらしい。先の殿はこの国を統べるために近隣の土豪を容赦なく掃討され、その際、大勢の女、子供の命までも平気で奪われたと聞いている。慈悲の心など微塵もなくまさに鬼のようで、無念のうちに死んでいった者は多く、先の殿の、早すぎる突然の死はそういった者たちの祟りだろう、と人々は噂した。

喚声の中、重吾は黒谷村の村人が集まっている一隅を目指した。人を掻き分け、何とか辿り着くと、そこはすっかり酒の匂いが立ち籠めていた。

「正吉はもう出たか？」と正吉の父、亀吉に訊く。

亀吉が上機嫌な顔を向けた。酔っていて息が酒臭い。

「遅いですよ、重吾殿。正吉はとっくに出ました」

亀吉の嬉しそうな顔を見れば、結果は訊くまでもなかった。亀吉の身振りを交えた話によると、正吉の投げが見事に決まり、勝負は一瞬のうちについたようだ。

「それはよかった」

重吾は安堵した。稽古をつけたのに結果が去年と同じでは立つ瀬がない。

「ひとつふたつ勝ったくらいでは喜べませんよ。正吉には是非とも褒美を獲ってもらわねば」

期待に胸を膨らませている亀吉は、正吉が勝ち続けるのを疑っていなかった。すでに褒美をもらった気でのだろう、笑い声を響かせて重吾に酒を勧める。周りにいた村人も口々に、あの強さなら褒美をもらえるに違いないと云い、重吾は正吉がどれほど強くなったのか、その目で早く見たくなった。

いよいよ正吉の次の対戦になり、正吉と対戦相手が控えの幕間から登場してきた。

対戦相手を見た亀吉は酔いが醒め、正気に還った。見詰めたままの目を動かさず、あぐりと口を開けている。今度の相手は大きすぎた。顔立ちは幼いが、躰は大人の力士とさほど変わらない。胸や腹は正吉のふたり分もあり、腕も足も丸太のように太い。

「何だ、何だ。親がそんな弱気でどうする。正吉が力を発揮できないではないか」

そうは云ったものの、重吾もあの体格差を見せつけられては、よもや正吉が勝てるとは思えなかった。村の連中も同じ思いだったようで、さっきまでの浮かれようはすっかり影を潜め、諦めの顔になっている。ああ、と溜め息を漏らすものもいた。しかし、肝心の正吉は違っていた。相手が自分より大きかろうと怯んではいなかった。却って闘志が湧いてきたようで、相手を睨みつけ、顔や胸を叩いて自分を鼓舞している。

行司の軍配が返り、正吉は相手の胸を目がけて肩からぶつかった。だが、相手の躰は微動だにせず、正吉の方が跳ね飛ばされて躰の均衡を失ってしまった。ここで相手に当たられたら一溜まりもなかったが、相手は急いで攻めては来なかった。摺り足をゆっくりと運び、正吉を土俵に追い詰める。手を大きく広げ、正吉が左右へ逃げられないようにしている。まともに組んだら躰の軽い正吉に勝ち目はない。それは正吉にも分かっているから、何処かに隙はないかと相手の様子を窺っている。いよいよふたりの距離が縮まり、相手が正吉を掴まえるべく、大きく広げた手を振り下ろした。掴まえられるその刹那、正吉は尋常ならざる跳躍で前方へ飛び上がり、相手の振り下ろした手を躲した。地面に下りると同時に素早く躰を反転させ、後ろから相手の両足をしっかりと抱きかかえた。正吉が渾身の力を込めて押すと、相手は両手をじたばたさせ、まるで大木が倒れるかのように前に倒れた。黒谷村の筵敷きにどっと歓声が沸く。行事が正吉の勝ち名乗りをあげる。正吉は嬉しそうな顔を亀吉に向け、手を振った。会心の角力に亀吉が我を忘れて重吾に抱きついた。

「相手のあの図体を見たときは正直駄目だと思いましたが、我が息子ながらたいしたもんだ」と、興奮冷めやらぬままに云う。

「ああ、凄いな正吉は。儂が教えただけのことはある」

重吾は鼻高々で軽口を叩いた。跳躍に優れている正吉の強みになると授けた技だったが、あれほど見事に決まるとは教えた当人も驚嘆だった。本当に正吉は褒美をもらえるほど勝ち進むのではないかと重吾は思った。

皆の期待どおりに正吉は勝ち進んだ。しかし、その勝ちは危ういものだった。勝ち上がるにつれて対戦相手が強くなったこともあったが、危うくなったその原因は正吉の足首にあった。巨体の童力士との対戦で地面に着地した際に痛めたようで、そのあとの相撲を取るのに正吉は苦痛に顔を歪めていた。そしてあとふたつ勝てば今年の覇者となり得るところまできて敗れてしまった。

。

「残念だったな。また来年がある」と、重吾は亀吉を慰めた。

「褒美をもらえるのは三人です。これで正吉は褒美をもらえない」

亀吉はすっかり気落ちしていた。褒美がもらえないことの方に未練があるようだ。

「勝ち残りこそできなかったが、敢闘した童力士にも褒美があると聞いたぞ。正吉は立派に活躍していたではないか。諦めるのはまだ早い」

亀吉が力なく首を振る。

「足を痛めなかったら勝てただろうに……惜しいことをした」

周りにいた黒谷村の村人が続々と帰り支度を始める。亀吉も重い腰を上げた。

「儂らはもう帰るが、重吾さんはどうしますか？」

「儂は最後まで見ていく」

「それなら正吉をお願いできますか」

亀吉は周りにいた村人たちと連れだって筵敷きをあとにした。重吾の周りはぼっかりと空き、重吾は誰に声援を送るまでもなく最後まで取り組みを見た。結びの取り組みはあっけなく終わり、土俵の向こうで歓声が上がった。勝ち残った力士の縁者だろう、喜び踊っている。勝ち残った童力士はそれほど強そうには見えなかった。躰つきも正吉の方が精悍で、来年こそは正吉が勝ち残れる、と重吾は確信した。

童角力は終わり、土俵の周りから人々が一斉に動き始める中、重吾は正吉を待っていた。やがて控えの幕間からふて腐れた顔の正吉が重吾の元にやってきた。

「悔しそうだな」と重吾は揶揄するような笑顔を見せたが、正吉はにこりともしなかった。

「勝ち残れなかったのも悔しいが、あんな奴が褒美をもらえたことの方がもっと悔しい」

「あんな奴？」と、重吾は怪訝そうに訊いた。

「隣村の喜作だ。敢闘したとかいって褒美をくださることになったけど、喜作はちっとも活躍なんかしていなかった」

口を尖らせ、憤懣やるかたないといった様子で正吉が云う。隣の赤江村の喜作は正吉よりも早くに負けていた。

「何かが殿の心に響いたのだろう。一生懸命に角力を取っていたとか、最後まで諦めない姿だとか、そういったところをご覧になったに違いない」

「俺だって一生懸命に取った」

悔しさのあまり、正吉は涙を零した。肩をひくひくさせ、嗚咽を漏らしている。

「そんなことぐらいで泣く奴があるか。来年、また頑張ればいい」

重吾は懐から手拭いを取り出し、正吉の涙を拭いてやった。

「さあ、村へ帰ろう」

朝から行われた童角力も、終わった頃には陽が翳り始めていた。急がなければ村に着く頃には暗くなってしまう。それは分かっていたが、重吾は寄り道をした。賑わっている城下を、正吉を連れて歩く。意気消沈している正吉を元気づけようと、重吾は軽業師の前で足を止めた。身軽な正吉が喜ぶだろうと思い連れてきたのだが、その目論見は当たり、正吉の目が輝いた。宙返りする軽業師を羨望の眼差しで見ている。さっきまでの沈んだ表情は消え、浮き浮きしている。

「お前ならすぐ出来るようになるだろうな」と、重吾は正吉に微笑みかけた。

「当たり前だよ。俺のたったひとつの取り柄だからね」

正吉も笑みを浮かべていた。その顔が曇った。

「だけど、出来たからって何にもならない。跡取りの俺が軽業師になれるわけじゃないからね」
寂しそうに云う正吉は、運命に抗えないのを諦観しているかのようだった。

なりたいと強く願えばなれる、重吾はそう云ってやりたかった。しかし、自分自身が侍から百姓に身を落としており、言葉に説得力がない。侍に戻りたいと願っても、戦でも起きなければ無理だろう。平和になった今、それを望んではいけない。

重吾が何も云えないでいると、正吉が小さく笑った。

「本気で軽業師になりたいわけじゃないよ。百姓で充分だ。お父たちと暮らせればそれでいい」

「そうか。そうかもしれないな」

重吾もそう思った。お静と暮らせればいい。慶吾が生きていればもっとよかったが――。

「遅くなると叱られるから急ごう」と、正吉が重吾の手を引っ張る。

街道を急ぎ、陽のあるうちに黒谷村に着く。

正吉を送り届け、重吾は我が家に帰ってきた。夕餉の支度をしていたお静に土産の筆を渡す。朝の怒った顔が打って変わり、お静がぱっと顔を綻ばせる。この一両日は、お静の機嫌はいいだろう、と重吾はひと安心した。

祭りが終わったあと、重吾の家に正吉が来ることはなくなった。近所なので顔を合わせることはあるが、正吉は家の手伝いで忙しく、重吾も畑仕事の合間は武士としての気概を保つために、剣術の稽古に明け暮れていた。何となく物寂しいまま五日が過ぎた。重吾が畑仕事を終えて家の前まで来ると、珍しく正吉が角力の稽古のときのように、重吾を戸口で待っていた。正吉は物憂げで、何か考え事をしていた。亀吉に叱られたただけだろう。そんなに深刻ではないと思った重吾は、正吉が久しぶりに来てくれて嬉しかったこともあり、大きな笑みを見せた。

「どうした？ 浮かない顔をして」

重吾の笑みにつられて正吉の口の端が微かに動いた。しかし、笑うには心に大きく引っかかるものがあるらしい。軽く考えてはいけなかったようだ。

「何か話があるようだな。とにかく中へ入れ」

重吾に促され、正吉は中へ入った。厨にいるお静に軽くお辞儀をし、板敷きに上がる。重吾も後に続くと、微かに墨の臭いがした。近所の子供たちを相手の書の稽古が終わったばかりのようだ。正吉も習いに来たのだろうかと思ったが、それにしても正吉の様子がおかしかった。

「どんな話だ？ 愉快的話ではなさそうだが……」

正吉が首を縦に振る。亀吉に何かあったのだろうか――。

「重吾さんは喜作を覚えているか？ 隣村の」

「ああ。たいして活躍しなかったのに褒美をもらった童力士だろう。そいつがどうかしたのか？」

正吉が伏し目がちになった。頬がピクリと動く。

「死んでしまった……」

「死んだ？」

重吾は驚いた。喜作を知っているわけではなかったが、幼い子供の死が痛ましかった。

「狼か野犬か、何かははっきりしないけど、獣に襲われて死んだらしいんだ、山の中で」

「獣に襲われたとは無惨だな、可哀想に。しかし……山の中なんかに何をしに行ったんだ？ 誰かと一緒だったのか？」

正吉は首を振った。

「喜作はひとりだった。童角力が終わったあとから誰も見ていなくて、赤江村の人が総出であちこちを捜してやっと見つけたそうなんだ。何処で見つけたと思う？」

正吉にそう訊かれても、重吾には見当もつかなかった。山は方々にある。だが、閃くものがあった。正吉の口振りからすると意外な場所のようだ。近くの山ではないだろう。

「城下向こうの山か？」

近くの山を捜し回ったあと、次に捜すとしたらその辺りだろうと重吾は思った。鬱蒼としていて付近の人でも滅多に近づかないと聞く。重吾の推測は当たった。正吉が目を丸くする。

「どうして分かったの？」

「なあに、俺の山勘は当たるんだ」と、少し得意げに云った重吾だったが、その心中は俄にかき曇った。山で子供が獣に襲われる——昨年も同じことがあった。別の山だが、時期は同じだった。

「喜作は何をしに城下向こうの山へ行ったんだ？ 何か聞いているか？」

重吾は不審の顔で正吉に訊いた。去年死んだ子供もひとりで山に入っていた。よほどの理由がなければ子供がそんな危ない山の中へ、しかもひとりで行くことはないだろう。

「さあ。村の人も、何をしに行ったのか分からないって云ってた。栗や茸を採りに行ったのかもしれないけど……。それで山の中で迷ったのかもしれない」

「そして獣に食い殺された……」と、重吾は呟いた。釈然としなかった。栗や茸ならわざわざ城下向こうの山に行かなくとも近くの山でも採れる。それに、誰にも内緒で行ったというのが引っかかる。内緒にしておきたい何かがあったのだろうか。

「でも……」

眉根を寄せて正吉が口を開いた。微かに怯えたような、気味悪がるような目をしていた。重吾は正吉の怖がりようが気にかかった。あんな奴と云っていた割に、喜作の死を身近に考えているようだ。親身になって考えているのとは違う気がする。

「変なんだ……。ひょっとしたら喜作は誰かと一緒だったのかもしれないんだ。喜作の死体の近くに、大人の足跡があったらしいんだよ。喜作が山に行く前のものかもしれないけど……」

「足跡が？」

驚く重吾に、正吉が頷く。

「何人かの足跡があったんだって。滅多に人が行かない山だから、喜作は誰かに連れて行かれて殺されたのかもしれないって、村の人は云ってた」と、正吉が涙目になって云う。

喜作の死体の近くに足跡があった——別の日の足跡かもしれないが、そんな偶然はないだろうと重吾は思った。喜作は誰かに連れて行かれたのか。だとしたら誰に？

「喜作の親が誰かに恨まれていたとか、そんな話は聞かなかったか？」

「親の身代わりで喜作は殺されたと思っているの？」と、涙をためた目で正吉が云う。

「殺されたとしたらそんなところが理由だろう。子供の喜作が殺されるほど人から恨みを買うとも思えないからな」

正吉は首を振った。

「何処にでもいる百姓だよ。人に恨みを買うような人じゃない。村の人は人攫いじゃないかって云ってた」

「人攫いか……」

その可能性はあるだろう。攫ってはみたものの、喜作に激しく抵抗されたために山の中で殺した、獣がその死体を見つけて食い散らかした――。

「怪しい集団を見た人がいたという話だよ。月明かりだったから、喜作がいたかどうかは分からなかったらしいけど……」

その集団が人攫いかもわからないが、重吾は釈然としなかった。抵抗されたからといって、わざわざ山の中へ連れて行かなくとも、その場で殺して逃げればよかったはずだ。それに、どうして喜作は村とは反対側の街道に向かったのだろうか、という疑問も残る。道を迷うほどの歳でもない。城下で攫われたのかもしれないが、喜作を攫うのなら、村への帰りでもよかったはずだ。いったい喜作は何処で攫われたのだろうか。

「人攫いかもわからないのだったら、役人には届けたのか？」

「もちろん喜作の親が訴えたらしいよ。でも相手にしてもらえなかったんだ。人攫いがいつまでも同じ場所にいるわけがないし、それに……たかが百姓の子だから」

正吉がとうとう涙を零した。悔し紛れの涙かと思ったが、恐怖の色をしていた。正吉が聞いてきた話は子供には恐ろしい話に違いない。しかし、正吉の怖がりようが重吾には異常に思えた。「喜作とそれほど親しくはなかっただろうに、どうしてそんなに怖がるんだ？」

流れ出た涙を正吉が手の甲で拭う。

「だって……俺だったかもしれないもの」

「どういうことだ？ どうして正吉は、自分がそんな目に遭ったのかもしれないと思うんだ？」

重吾は解せなかった。正吉と死んだ喜作には何も接点がないはずだが――

「喜作も去年死んだ子も童力士だったんだよ。ふたりとも褒美をもらっていた。ふたりとも童角力が終わったあと行方不明になって、山の中で獣に食われたんだ。褒美をもらっていたら、俺がそうになっていたかもしれないんだ」

正吉の怖がる理由は分かった。だが、考えすぎだ、と重吾は思った。褒美をもらうのはひとりではない。三人だ。他のふたりは死んでいないし、第一、喜作は誰かに殺されたと決まったわけでもない。山に迷い込んで獣に食い殺されただけかもしれない。ふたりの死んだ子供が童力士だったのは偶然に過ぎないだろう。

「怖がる気持ちは分かるが、どうして褒美をもらったから殺されたと思うんだ？」

「褒美を横取りしようとしたんじゃないかな」

褒美は米だった。貧しい百姓にとってそれは高価な代物だ。重吾でさえ滅多に口に出来ない。家に届けられた米と子供を交換に――と考えられなくもない。しかし、それにしてはあっさり殺している気がするし、届けられたあとに家に押し入った方がことは簡単だろう。

「儂は違うと思うがな……」

「じゃあ、重吾さんはどう考えるんだよ」

そう訊かれても重吾に答えはなかった。何か、根本的に違っている気がしていた。喜作が生きているうちにか、それとも死んだ後かは分からないが、獣に食われたのは間違いない。そして、喜作はおそらくひとりではなかつたろう。だが、人攫いではない気がする。

「儂には分からない。隣村の人は皆、人攫いの仕業だと云っているのか？」

「ほとんどの人はね」

「違う人もいるのか？」

「童角力が崇られているんだって云う人もいるよ」

「崇られている？」

「ほら、神社からお城に場所が変更になつただろ。そのせいじゃないかって」

重吾は一笑に付した。崇りなどあるはずがない。おおかた人の不幸を喜ぶ奴が流した、たちの悪い噂話だ。先の殿は崇られて死んだとか、この手の話を好む者は多い。

「崇りなどというのは愚にもつかない話だ。しかし、崇りであれ何であれ、喜作が獣に食われたのは間違いない。そのことは捨て置けないな」

「というと？」

「一度人の肉を食った獣は、その味を覚えてまた人を襲うかもしれないからな。山狩りをした方がよさそうだ。見つけて退治すれば安心だろう」

「山狩りして見つかるかな……」

正吉が懐疑的な顔をする。重吾も無理かもしれないと思っているが、やらないわけにはいかなかった。人の臭いにつられて、獣が里へ下りてきたらまた犠牲者が出るだろう。

「どうだろう。見つければいいが……とにかく松沢様にお願いして人手を集めてみよう」

松沢様と聞いて正吉は、重吾が本気で獣退治に取り組んでくれると期待したようだ。正吉の中にあつた怯えは薄らぎ、子供本来の無邪気な笑顔が浮かんでいる。

翌日、重吾は有力家臣のひとりである松沢丹波の屋敷を目指し、街道を城下に歩いた。戦に負けて行く末に当てのなかった重吾たちを救ってくれたのが松沢丹波だった。重吾が黒谷村へ移ってきた仲間を束ねており、何か困ったことがあつたらいつでも来い、と云われていた。

祭りのときほどではないにしても、城下には相変わらず人が多かつた。これもひとえに、農業だけでなく、商業も推し進めておられる今の殿のお陰といえる。市中の治安はよく、強盗の類はほとんどなかつた。が、それでもごろつきや浪人による刃傷沙汰がないわけではなかつた。そして、城下を離れば人攫いのような悪人どもはまだまだいた。

松沢丹波の屋敷に着く。

家人に告げると、家人はすぐに来意を伝えてくれた。重吾は前庭に通され、松沢が来るのを待った。やがて松沢が縁側に現れ、平伏する重吾の目の前でとまった。松沢がその場に腰を下ろし、重吾を見下ろす。

「久しぶりだな、堀田。頼み事があるそうだが、何だ？」

「はっ」と、重吾は畏まった。

「松沢様には赤江村の子供が獣に食い殺された件、お聞き及びでしょうか？」

「うむ、知っておる。人攫いに遭つた子供の話であろう、それがどうかしたのか？」

やはり人攫いの仕業のようだ。小さな疑問はあつたものの、重吾は納得した。

「子供を襲った獣が再び里へ下りては危のうございます。退治の方がよろしいのではないかと考えておりますが、いかがでございましょうか？」

重吾の耳に、ふふふ、と押し殺した笑い声が聞こえた。重吾は、松沢が取り合ってくれないのだろうと思い、微かな虚無感を覚えた。重臣の松沢にはくだらないことだったのかもしれない――。

「そのことならもう済んでおる」と、笑いを残したまま松沢が云う。

済んでいる？ どういうことだろう。

「お恐れながら、おっしゃる意味が分かりかねますが……」

「お主は退治したいと申したのであろう。そのことが済んでおるのだ。城の者が用向きでたまたまあの辺りを通り、うろついていた山犬を退治したそうだ。せっかく獣退治を申し出てくれたが、無駄足だったな」

松沢の笑い声が一段と高くなった。

重吾も笑った。そうと知らずにしゃしゃり出た恥ずかしさもあつたが、退治されたのであれば何よりだ。安堵感に包まれ、重吾は辞した。正吉にいい報告が出来ると思った。

帰る道すがら、心に何となくもやもやしたものがあつた。

退治された山犬は喜作を襲った獣だったのだろうか――。

里をうろついていたのだからそうかもしれないが、他に仲間がいたかもしれないし、まるっきり別の獣だったとも考えられる。重吾は引き返して松沢に問い質そうかと思った。しかし、重吾が踵を返すことはなかった。何度も訪ねて来て煩わしい奴だ、と大恩ある松沢の心証を悪くしなかつた。まともな武士に返り咲きたいと願っている重吾にとって、松沢は唯一の頼みの綱だった。

家に帰ると、中で正吉がお静とともに待っていた。正吉は筆を持っていた。

「松沢様は何とおっしゃったの？」と、今日から始めた手習いの手を休めて訊く。悪い報せであるはずがないと確信しているかのように、墨のついたその顔は期待する喜びに溢れていた。

「ああ、安心しろ。獣は退治されたそうだ」

「やったあ。ざまあみろ」と、正吉が歓声を上げる。

お静も喜んだ。正吉と顔を見合わせて笑っている。

「これで安心して暮らせますね」

「城の者が退治したそうだから間違いないだろう」

「俺が退治したかったな」

正吉が笑いながら悔しがる。その様が可笑しくて重吾もお静もさらに笑った。

みんなに報せてくると云い、正吉が家を飛び出していった。

正吉の後ろ姿を見送ると、重吾はもう笑っていなかった。

退治された山犬は、本当に喜作を襲った獣だったのだろうか——その思いが頭をよぎる。

「どうかなさったんですか？」

お静の問い掛けに、重吾は首を振って微笑んだ。

「何でもない」

そう、何でもないことだ。考えすぎだ。喜作を襲った獣は退治されたんだ。

重吾は小さな蟠りを持ちつつ、自分に言い聞かせた。

半年が過ぎると、喜作が獣に食われたことなど誰も口にしなくなった。

やがて秋になり、今年も稲穂がたわわに実った。秋の収穫が終わればまた祭りがやってくる。去年の童角力を観て、子供に角力の稽古をつけてくれ、と云ってくる近隣の村人が何人もいたが、重吾は断った。今年もすでに正吉の稽古を始めており、他の子供まで面倒を見きれないと思った。重吾は正吉だけに集中したかった。だが、今度云ってきた相手は断り切れなかった。

重吾が畑仕事を終えて家に向かっていると、お静が慌てた様子で畦を駆けてきた。松沢様の使いの者が来ていると云う。急いで帰ると、先だっで見かけた家人が待っており、重吾は待たせたことを詫びた。

「それで、どういってご用件で……」

重吾は家人の顔色から用件の内容を探ろうとした。厳しい話なのか、それとも喜ばしい話なのか、読み取ろうとしたが、家人は真顔のままだった。

「実はな、お館様の甥っ子の剣介様が童角力に出場なさりたいそう。そこでお主に角力の手解きを願いたいとのことだ」

「名誉なことだとは思いますが、私にそのような役目が務まるとは思えません。荷が重すぎます。どうか他の者に……」

重吾の脳裏にまず浮かんだのは、松沢の役に立ちたいということだった。しかし、しくじったら大変なことになる。松沢には子がおらず、松沢家の家督を継ぐのは甥の剣介だと聞いている。そんな子供がいくら童角力とはいえ、衆人環視の中で無様な負けを晒してしまったら責任を取らないわけにはいかない。命まで取られることはないにしても、何らかのお咎めはあるだろうし、松沢に見捨てられるかもしれない。云ってしまったあとで重吾は危惧を抱いた。松沢の依頼を断るという選択肢が自分にあったのだろうか。断ったりして、生意気だと思われなかっただろうか――。

重吾はそっと家人の顔色を窺った。家人に変化は見られず、不愉快そうではなかった。

「これは剣介様直々のお頼みなのだ。剣介様は今年の童角力をご覧になり、この村の童力士が見せた、高く飛び跳ねる技をいたく気に入られ、あのように華麗に飛んでみたいとおっしゃってな、そこでお主に頼むことに相成った。お館様もお主なら見知っているし、適任だろうとおっしゃった。何も只でやれというのではない。手間賃も出る」

重吾は黙っていた。手間賃は魅力的だが、気乗りがしない。出来ることなら断りたい。しかし、家人の口調はそれを許しそうになかった。断れないのであれば、せめて正吉のために約束を取り付けておきたい、と重吾は思った。

「わたくしはすでにひとりの子供に角力を教えております。その子供も一緒に稽古をつけてもよろしいのでしょうか？」

「一緒にか……」と、家人が険しい顔をする。承諾していいものかどうか、判断がつかないようだ。そんなことを言い出されるとは思ってもいなかったのだろう。

「そのことはお館様にお伺いをたてる。いずれ沙汰を報せるが、お館が否とおっしゃったら諦めるのだぞ、いいな」

そうになったら仕方がない。正吉には済まないが、正吉なら分かってくれるだろう。

「剣介様に角力の手解きをいたす件、しかと申しつけたぞ」

遣いの家人は念を押し、重吾の家を後にした。

重吾は気が重かった。恩返しのためにも松沢の期待に応えたいが、それは難しそうだ。剣介が素直に自分の教えに従ってくれるとは思えなかった。身分が違いすぎる。かたや有力家臣の家を継ぐ身、そして重吾は百姓とたいして違わない。子供心にも、上下の意識は持つだろう。

重吾が浮かぬ顔をしていると、お静が膝を寄せてきた。

「松沢様のお役に立ててよかったですね」と、嬉しそうに云う。しかしその顔は、心から喜んではいなかった。重吾の心中を察し、努めて明るく振る舞っているようだ。

「お役には立ちたいが、上手くいくかどうか……。せいぜい剣介様の機嫌を損ねないようにしないとな」

「上手くいきますとも。ひとつも勝てなかった正吉があれだけ勝てたではありませんか。きっと大丈夫です。旦那様は角力を教えるのが上手ですから」

重吾は微かに笑った。お静の気遣いが有り難かった。萎えそうになっていた心持ちが少しだけ持ち直した。

剣介に角力を教える日が来た。城下にある松沢の屋敷へと向かう重吾の傍らには正吉の姿もあった。意外なことだったが、正吉にも一緒に稽古が許された。童角力は身分に関係なく執り行われるのだから、不都合なことは何もない、子供の稽古相手が出来て却ってよかったくらいだ——松沢はそう考えていた。松沢の寛容な計らいに重吾も正吉も感謝したが、肝心の剣介は違っていた。重吾たちが家人の案内で屋敷の前庭に行くと、そこには露骨に不満そうな顔をしている剣介がいた。簡易に作られた土俵の前で口を尖らせている。

「伯父上、どうしても百姓の子と稽古をしなければなりませんか？」と、縁側の松沢に云う。

「またその話か。何度も云って聞かせたであろう。百姓の子が相手では稽古にならないというが、あの飛び跳ねる技を繰り出したのはその子供ではないか」

「ですが……」

「その子供は去年、かなり勝ち進んだぞ。稽古にならないというが、お前が勝てるのか？」

剣介がますます不満そうな顔をする。

「伯父上、見縊らないでください。こんな百姓の子などひと捻りです」

松沢の前に平伏していた重吾は、並んで畏まっている正吉の横顔を盗み見た。案の定、正吉の顔には怒りがあった。その感情を必死に堪えている。

「ならば一勝負、やってみたらどうだ？」

剣介がつかつかと土俵の中央へ行く。正吉が、どうしたらいいのかと重吾を見る。

「わたくしが行司を……。正吉も土俵へ」

重吾に促され、正吉は剣介の前に立った。剣介が諸肌を脱ぐと、正吉も倣った。侍の子に負けてたまるか、百姓の子に負けてたまるか、とお互いに闘志をみなぎらせている。痩せて上背のある正吉にたいし、剣介の躰はまだ幼さが残っていて、背も正吉よりは頭ひとつ小さかった。それでも無駄な肉はついておらず、日頃、剣術に精を出しているのが見て取れた。

「はっけよい……のこった！」

前庭に重吾の声が響くと同時に、ふたりの子供は躰をぶつけた。剣介が正吉を土俵の隅に押し込む。ずるずると正吉は後退したが、ひょいと躰を捻ると、剣介をあっという間に土俵に転がした。正吉は剣介の実力を計っていただけだった。

どうして自分が負けてしまったのか、訳が分からないと剣介は呆然としている。

「どうした、剣介。勝てないではないか」と、松沢がからかいの声で云う。

呆然としていた剣介の顔が元の不服顔に変わった。

「今のは……足が滑っただけです。もう一番」

重吾はどうするか迷った。もう一度やったところで結果は見えている。ふたりの力は歴然としていて、剣介が勝てる見込みは万が一にもなかった。何度も続けて百姓の子に負かされれば、剣介の武士の子としての矜持を傷つけてしまうだろう。

「堀田、何をしている。もう一番だ。正吉、手加減するでないぞ」

正吉も戸惑いを見せていた。正吉の顔から怒気は消え、あっさりと勝ってしまったことを後悔しているようだった。相手は武士の子、正吉とて無用の恨みは買いたくないのだろう。しかし、松沢に手加減するでないと言われ、正吉の顔つきは変わった。

土俵で睨み合い、重吾の掛け声で再びふたりは躰をぶつめたが、今度は正吉がさがることにはなかった。ぐんぐん剣介を押し、そのまま土俵の外へと押し出した。

「もう一番」と、剣介が声を張り上げる。

もはや重吾の行司は必要なかった。睨み合ったふたりは互いの呼吸で角力を始めた。そして剣介は転がされ、その度に立ち上がって正吉に向かっていった。このままでは一番も勝てないと思ったのだろう、剣介が正吉目がけて突進し、ぶつかる寸前に跳ね上がった。正吉の技を真似たようだ。しかし、正吉を飛び越えることは出来ず、ただ腹を正吉の顔に当てただけだった。正吉は後退りをすると、こうするんだと云わんばかりに、剣介を飛び越えて見せた。その高さに剣介は目を見張った。為す術もなく、後ろに廻った正吉に背中を押され、剣介は前に倒れた。

「堀田、これで剣介も己の不甲斐なさを思い知っただろう。明日からまた頼む」

松沢の言葉に重吾は平伏した。ふと剣介を見ると、剣介は倒れたまま泣いていた。悔しそうに嗚咽を漏らしている。正吉が起こそうと手を差し伸べたが、剣介はその手を払いのけた。仕方なさそうに、正吉は重吾の元にやってきた。ふたりは家人の案内で屋敷の外に出た。

「本当によかったのかなあ……何にもなければいいけど」

正吉は剣介の報復を恐れているようだ。侍の子が徒党を組み、百姓の子をいたぶる光景は当たり前に見られていた。ましてや剣介は重臣に繋がる身、大勢の子供を集められるだろう。

「手加減するなと松沢様がおっしゃったのだ、安心しろ」

重吾が笑顔を見せても、正吉の顔は曇ったままだった。

安心しろと云ったものの、重吾にも杞憂はあった。手加減するな——を、額面どおりに受け取ってよかったのだろうか。あそこまで徹底的にやらなくともよかったのではないか。剣介が辞めると云いだしたりしないだろうか。もしそうなったら——

「明日もいくの？」と正吉が訊く。

「行くより他にないだろう」

重吾たちに選択肢はなかった。明日も松沢の屋敷に行かなければならない。剣介はどうするのだろう。そのことがふたりの脳裏に重くのしかかっていた。

次の日、重吾たちがどうなることやらと思いながら松沢の屋敷へ行くと、昨日とは打って変わった態度の剣介が重吾たちを迎えた。家人に代わり、こちらへ、と重吾たちを案内する。重吾と正吉は顔を合わせて目を丸くした。まるで師匠を迎える弟子のようだ。

土俵のところまで来ると剣介が改まった様子で口を開いた。

「昨日は失礼しました。これからの稽古、よろしく願います」と、頭を下げる。

「いやいや、こちらこそ……」

剣介の殊勝な物言いに、重吾は思わずあたふたとなった。

正吉は剣介の変容を気味悪く思ったようだが、負かした余裕からか、重吾が戸惑いを見せたのに対し、正吉は落ち着いていた。面白がっているようでもあった。

「昨日とは別人ですね」と剣介に、面と向かって云う。

重吾はひやりとした。小馬鹿にしていると受け取られても仕方なかった。しかし、剣介は意に介さず、にこりとしている。

「ええ、別人です。わたしは自分の未熟さを思い知らされました。実は、わたしはこの辺りに住む子供には角力で負けたことがなかったのです。きっと松沢家にゆかりの者だから手加減してくれていたのでしょう。それとも知らず井の中の蛙になっておりました。ですが、童角力に出ると決めた以上は無様な姿は晒せません。重吾殿、正吉殿、何卒よろしく申し上げます」

侍の子の剣介に深々と頭を下げられ、平静だった正吉もさすがに慌てふためいた。

「こちらこそ……」と上擦った声で、ぎくしゃくしたお辞儀を返した。

なにはともあれ——重吾はほっとしていた。有力な家の縁者に生まれた剣介はちやほやされて育ったのだろうが、性根は素直なようだ。この分だと、ふたりの子供は互いに切磋琢磨して強くなってくれるだろう、と思った。

「松沢様は？」と、重吾は剣介に訊いた。辺りを見渡してもいる様子がない。

「お城からまだ戻られません。稽古が終わる頃には戻られると思いますが」

「そうか」

公務で忙しいようだ。喜作を殺した山犬の件を訊いてみたかったが、今度にするしかない。

「では始めるとするか」

その日から本格的な稽古が始まった。

足の運び方、腕の使い方、投げの打ち方など、一通りの基礎を教える。剣介は飲み込みが早かった。重吾の予想以上で、同じ思いを正吉も持ったようだ。初めは鷹揚に構えていた正吉だったが、その顔は次第に真剣になった。動きのひとつひとつに必死さが感じられ、たとえ稽古であっても負かされたくないという意地が窺える。それは剣介も同じだった。剣介は昨日の雪辱を果たすべく、死にものぐるいで正吉の躰に当たっていた。そんなふたりを見ていて、兄弟のようだなと重吾は思った。実際、正吉の方が剣介よりもひとつ年上だった。何とか兄に追いつこうとする剣介、そうはさせじとする正吉、重吾には何処にでもある兄弟の風景に見えた。

稽古が終わる頃には昨日ほどの実力差はなくなっていた。剣介が正吉に勝つことはなかったが、簡単に転がされはしなかった。ふたりの子供が井戸水で汗を流す。冷たい水を掛け合ってふざけている。重吾は松沢の帰りを待って挨拶をしたかったが、しばらく待っても松沢は帰ってこなかった。公務の時間は過ぎているはずだが、城で何か問題でも起こったのだろうか。

稽古が順調に始まったというのに、村へ帰る道の正吉の様子は妙だった。口数が少なく、重吾の話にも何処か上の空のようだった。

「どうかしたのか？ 正吉、元気がないぞ」

「うん……」と、正吉が気のない返事をする。

とぼとぼと背中を丸めて歩く正吉から生気が感じられない。

「剣介が強くなって驚いたのか？」

「違う」

「分かった。腹が減ったのだな？」

重吾が揶揄して云うと、正吉はむきになった。

「違うよ。そんなんじゃない」

「ではどうしたというんだ？ いつものお前らしくないじゃないか」

「童角力だよ」

「まだ喜作みたいな目に遭うと思っているのか？」

「それもあるけど……当たるかもしれないじゃないか」

「当たるって？」

「剣介様だよ。剣介様とは当たりたくない。他の侍の子ならぶん投げてやりたいけど、剣介様は別だ。みんなの前で恥を搔かせたくないんだ」

確かに正吉の云うとおり、剣介と当たることがあるかもしれない。

「わざと負けようというのか？」

「そうした方がいいかなって……」

「それをされて剣介様が喜ばないのか分かっているだろう？」

「うん……」

「だったらするな」

「うん……」

「それに……わざと負けると云うが、ひょっとしたら剣介様に勝てないかもしれないではないか。童角力まであと半月もある。剣介様がお前を追い越すかもしれないぞ。お前も今日の剣介様を見ていてそう思わなかったか？」

「うん……ちょっと思った。剣介様は腕の力が凄いんだ。でも俺は負けないよ。稽古であっても剣介様には負けたくない」

「その意気だ。腹は減っているだろう、うちで飯を食っていくか？ お前はやせっぽちだからな、もう少し肉がつけばもっと強くなれる」

飯を食わせてもらえると聞き、正吉は喜び勇んで重吾の家へと向かった。多くの百姓の子がそうであるように、正吉も食べ盛りだというのにろくなものを食べていないので瘦せていた。しかし、皆が瘦せているわけではなく、いい肉付きをしている百姓の子もいた。童角力の帰りに獣に食われた喜作がそうだった。

三日が経つと、剣介はさらに実力をつけた。十番のうち、ひとつかふたつは正吉から勝てるようになっていた。剣介の上達は驚異的で、この分だと近いうちにふたりの実力は互角か、あるいは剣介の方が上回るかもしれないと重吾は思った。そしてその日の稽古が終わる頃、松沢が縁側に姿を見せた。剣介を励ましに来たにしては難しい顔をしている。

正吉たちが汗を流しに井戸へ行くと、重吾は松沢に、下から話し掛けた。

「このところお忙しいようでしたが、城で何か問題でも起こっているのですか？」

松沢がじろりと重吾を睨む。その顔に戸惑いの色が浮かんだ。

訊いてはいけないことだったのかもしれないが、重吾は重ねて訊いた。

「話していただくわけには参りませんか？」

自分のような身分の者が城のことに口を出してはいけないのは分かっていた。しかし、時節柄、童角力に何らかの問題があると思えてならず、もしそうなら知らずにはいられなかった。

松沢が一呼吸置いて口を開いた。

「確かに問題が起こっている。まあ、堀田は口が硬いから話しても大丈夫だろう」

「それは童角力のことでございますか？」

「よく分かったな」

「昔から勘はいい方でして……」

「うむ。童角力は崇られているなどと、妙なことを云いだした奴がおるらしい。もちろん馬鹿げた話だ、誰が言い出したのかもはっきりしない。まあ、おおよその見当はついているが……。馬鹿げた話だが、それでは済まなくなったのだ」

松沢が渋い顔をする。

「それはどうしてです？」

「裏があったのだ、その崇りの話には。場所を移したせいで崇られていると噂を広め、童角力の開催を危うくさせ、その責任を筆頭家老の久坂様に負わせようという魂胆のようだ。久坂様が場所替えをお決めになったからな。神社が手狭になったのもあったし、近くでご覧になりたい殿のご意向もあったのだが、久坂様のやり方は少しばかり唐突で強引だった。神社と縁故の者もいたのに、有無を云わせぬやり方だったから恨まれてしまったのだろう。神社自体が絡んでいるのかどうかは分からないが、童角力では賭け事も行われていたらしいから、それを取り上げられて頭に来ているのかもしれない。いま、城内は二手に分かれている。久坂様を養護する派と追い落とそうとする平岡様の派だ。童角力を前にして城内は揉めているところだ」

重吾は驚いた。領民が楽しみにしている童角力の裏でそんなことが行われているとは、夢にも思わなかった。たかが童角力なのに、それさえ政争の具にする城の者たちを重吾は嫌悪した。

「松沢様はどちらの派でございますか？」

松沢にはそんな政争に加わって欲しくなかった。

「儂か？ 儂はどちらでもないが、しいていえば久坂様派だろうな。殿が城での開催をお望みな
のだから、たとえ崇りがあったとしても久坂様に非はない。殿の意向に沿われただけだ」

どちらにも与しないというのは難しいようだ。それでも、松沢が積極的にくだらない揉め事に
加わってなくて重吾は安堵した。

正吉たちが戻ってきたのでふたりは話をやめた。

その日はそれで終わったが、さらに三日後、剣介たちがいつものように稽古に励んでいると、
稽古が終わるのを待ちかねるかのよう松沢が縁側に腰を下ろし、今か今かと苛ついた様子を見
せた。何か話があるのが見て取れる。重吾は松沢に向けていた視線を正吉たちに戻した。

「剣介の上達は素晴らしいな。正吉も上達しているがそれ以上だ。もうほとんど互角とってい
いだろう。この分だとふたりが勝ち残ることになるかもしれないな。ちょっと早いけど今日はこれ
で終わりにしよう」

重吾が微笑んで云うと、正吉たちも笑みを浮かべた。ふたりとも勝ち残る——そうならば願っ
てもないことだと顔に書いてあった。

ふたりが井戸に向かうと、重吾は真顔で松沢に向き直った。

「何かお話がおありになるようですね？」

「うむ。先日の件だ。妙なことになってきた」

「妙なこと……でございますか」

「崇りの話だが、平岡派の者が、今年も同じように童力士が崇りに遭って食い殺されたらいか
がなされますか、と久坂様に問い質したのだ」

「起こることを前提に話をするとはい……まるで崇りが起こるのを望んでいるようですね」

「そうだ。望んでいるのだろう。問い質した際の様子は脅しをかけているようにも見え、僕は奴らが崇りのせいにして童力士を殺すのではないかと思った。去年もその前も、人攫いではなくて奴らの仕業だったのかもしれない。久坂様は、崇りなど起こるはずがない、とおっしゃったのだが、奴らが尚も、今年は山犬ではなくて鬼かもしれませんよ、と戯れ言を云うと、普段の久坂様なら聞き流されるはずなのに烈火の如くお怒りになった。久坂様は奴らが何を企んでいるのかをご存じなんでしょう。それはおそらく僕が申したように、崇りに見せ掛けた童力士の殺害だ。山犬に食わせたのは刀傷を隠すためだったのかもしれない。卑劣だ、奴らのやることは何処までも卑劣だ。何が起こるのかをご存じだから僕に忠告して下さったのだ」

「久坂様が忠告なされたのですか？」

「ああ、剣介は出ない方がいいと」

「剣介様が標的にされるかもしれないからですね」

「そうだ。剣介が選ばれるかもしれんからな」

「しかし……誰に褒美を与えるのかを選ばれるのはお殿様でしょうし、久坂様が童角力を取り仕切られるのではありませんか？」と、重吾は確かめるように訊いた。

「何から何までな。土俵の設営から褒美の手配まで久坂様の手の者がやることになっている」

「ならば、久坂様を快く思っていない連中が出る幕はないのでは？」

「うむ……」

そこの考えは松沢に思い浮かばなかったようだ。

「それに……剣介様が選ばれたとしても警護すればいいだけの話ではありませんか。幸い、松沢様の屋敷は城のすぐそばです。帰りを攫うことも出来ないでしょう」

「うむ……。それもそうだな。忠告は用心のためだろうが、しかしなあ……。儂としては剣介を危ない目に遭わせたくないのだ。万が一のことが起こらないとも限らないからな」

「童角力に出さないおつもりですか？」

重吾は眉根を寄せた。心のうちを不快な風が通りすぎる。

「そうするより他ないだろう。用心に越したことはない」

「お気持ちは分かります。わたくしも、正吉にも剣介様にもそんな目には遭って欲しくありません。ですが、ふたりとも童角力に全力を注いでおります。わたくしや松沢様に誉めてもらいたくて毎日必死に稽古に励んでおります。その気持ちを考えると、今さら出るなどは云えません」

「儂とて剣介の気持ちは分かっておる。堀田に稽古をつけてもらったお陰でかなり上達し、本人も最後まで勝ち残るんだと張り切っておる。剣介の活躍する姿を見てみたいと思っておる。しかしだ……。かすり傷のひとつもつけて欲しくないのだ」

松沢の顔は苦渋に満ちていた。剣介を想う松沢の親心が胸に痛い。実子でないだけに、その想いは余計に強いのかもしれない。しかし、溺愛が過ぎる、と思った。危ないからといって遠ざけてばかりいては、剣介は何も出来なくなってしまう。

「わたくしが警護を務めます。微力ではございますが、敵の二、三人ならあっという間に叩き斬ってご覧に入れましょう。これでも戦では何度か手柄をあげたことがございますから。ですから、剣介様を童角力に出してあげていただけませんか」

「うむ……」

それきり松沢は腕を組み、黙ってしまった。松沢の視線は動かなかった。視線の先には剣介たちがいた。汗を流し終え、重吾たちの元に歩いてきている。

「どうかなさったのですか？ 伯父上。難しい顔をなさって」

「いや、なに……」

「わたしが童角力で負けるかもしれないとお思いでしたらお考え違いですよ。わたしも正吉殿もますます強くなっております。ふたりで最後まで勝ち残るかもしれませんよ」

得意げに話す剣介に、松沢が弱い笑みを見せる。

「そうか……。それは楽しみだな」

このあと、松沢は剣介を説得するのだろうが、剣介の性格を考えればそれは失敗するだろう、と重吾は思った。反久坂の連中が崇りにかこつけてことを起こすのは間違いない。重吾は童角力を憂えた。また誰かが殺されてしまう。それは剣介かもしれないし、正吉かもしれない。いっそのこと、騒ぎを起こして童角力を中止させようか、と重吾は考えた。しかし、ひとりで中止になるほどの騒ぎを起こせるはずはないし、執り行っている久坂様に迷惑がかかってしまう。第一、そんなことをすれば反久坂の連中に利するだけだ。何かいい方策はないだろうか――

村への帰り道は稽古が早く終わったために、いつもよりも陽が明るかった。

「童角力のことだがな、正吉……」と、重吾は話し掛けた。

「なに？」

「崇りがあるのかもしれないと云ってただろう、本当に崇りがあったらお前はどうする？」

正吉は崇られて喜作のように殺されるのを恐れていた。今でも恐れていて、それほど童角力に固執していないのであれば、出さなくともいいのではないかと重吾は思った。

「崇りなんてないって重吾さんは云ってたじゃないか」

「もしもだ……。そんなものがあつたとしての話だ」

松沢から聞いた話をある程度はした方がいいだろうか。その方が分かり易いし、説得力が違う。しかし、口が硬いと見込まれたこともあり、正吉が相手でも重吾は話すのをやめた。大人たちの汚い争いに巻き込まれて喜作は殺されたのかもしれない——そんな話はしたくなかった。

「崇りは怖いけど、出たいな……」と、上目遣いに正吉が云う。

「そうか、出たいか」

そのために稽古を積んできたのだから当然だろう。重吾は正吉の頭を撫でた。出たくないと言ってくれるのを望んでいた自分が厭わしかった。

「ねえ、重吾さん。本当に崇りはないの？ 本当はあるんじゃないの？」

「心配するな。崇りなんてものはない」

「本当だね？」

「ああ、本当だ」

にっこりと微笑み、正吉が安堵の顔を見せる。

崇りなんてものはない。ただ——去年の喜作のようなことは起こるだろう。それが誰の身に起こるかは分からない。正吉や剣介に起こるとは限らないし、自分が目を光らせていれば護ってやれると重吾は信じていた。正吉や黒谷村の人たちと一緒に剣介を屋敷に送り、それからみんなが村へ帰れば襲われることはないだろう。村の者は不審に思うかもしれないが、食い殺された喜作のことは知っており、用心に協力してくれるはずだ。

いよいよ童角力の当日になり、重吾は村のみんなと城へ向かった。今回はお静も一緒だった。童角力など興味がなかったくせに、去年正吉が活躍したから見たくなったという。

「今年こそは正吉には褒美を獲ってもらわねば。それが楽しみで一年間働いてきたようなものだ」

重吾を先頭にぞろぞろと歩く中、亀吉が重吾に話し掛ける。褒美をもらえるに越したことはないが、そのために反久坂の、平岡派の手にかかっては何にもならない。重吾たちの後ろをお静や亀吉の妻、正吉、そして村の人たちがついてきていた。

重吾は振り返ってみんなの顔を眺めた。亀吉と同じで、どの顔もこれから行われる童角力に浮かれている。前もって、去年の喜作のようなことが起こるかもしれないから、と云ってあったのだが、本気にはしてくれなかったようだ。いざとなったら自分が何とかしなくてはならない——重吾はその思いを強くした。

土俵の近くに重吾たちは筵を敷いて座り込んだ。村を早く発った甲斐があって、絶好の場所だった。そこなら童力士たちの動きが余すところなく見られる。

初めて童角力を見るお静は高揚していた。亀吉の妻とのお喋りがとまらないでいる。

「正吉、負けるんじゃないぞ。絶対褒美をもらうんだからな」

控えの幕間へ向かう正吉の背に亀吉が声を掛ける。緊張しているのか、それともまだ怖がっているのか、正吉の耳に亀吉の声は届いていなかった。正吉の顔は強張ったままだった。

続々と観衆が集まり、重吾たちの周りは人で溢れた。亀吉が早速、村の人たちと酒を呑み始める。しょうがないなと見やっていると、辺りのざわめきが水を打ったようにやんだ。重臣たちとともに、棧敷に殿が姿を現された。穏やかでいい顔をされている。棧敷の下にある、童力士の控えの幕間からはそのご尊顔がよく見えたことだろう。重臣の中には松沢の姿もあった。説得に失敗した剣介が気になるようで、しきりに視線を幕間に送っている。気になるのは平岡派の奴らかもしれなかった。重吾も目を光らせたいが、残念ながら重吾には誰が平岡派など分かるはずもなかった。

太鼓が響き渡り、童角力の開始が告げられると、城内に歓声が沸いた。重吾の周りでも、登場するのはまだ先だというのに、早くも正吉に声援を送っている。

そして最初の取り組みが始まると、歓声はさらに高まった。勝負はあっという間につき、悲喜こもごもの声が辺りに満ちる。そのあとの取り組みも勝負がつくのは早かった。初めのうちの取り組みは実力差があってつまらないものばかりだった。よほど恐ろしかったのだろう、中には対戦する前から泣き出してしまう童力士もいた。

「ちょっと知り合いのところへ行ってきました」

重吾は亀吉に耳打ちしてその場を離れた。ぐるりと廻って棧敷を目指す。控えの幕間の前には警護の者がついていて。去年はいなかったが、警備を強化したようだ。さらに棧敷に近づくと、重吾は別の警護の者に止められた。

「何をしに来た？」と、胡乱な目つきで重吾を睨む。

「松沢様にご挨拶を申し上げますに……」

警護の者は重吾をなおも胡散臭そうに見ていた。

「松沢様はお忙しい。お前のような者にお会いになるはずがない」

確かに、松沢は殿の傍で忙しいだろう。人でごった返しているこんなときに、重臣のひとりと会うのは叶わないことなのかもしれない。しかし、誰に目を光らせていけばいいのかを訊かなければ、重吾とて正吉たちの警護の仕様がなかった。重吾は、お会いしたいと粘ったが、警護の者は取り合ってくれなかった。押し問答が続く中、当の松沢が姿を現した。

「儂の知り合いだ、怪しい者ではない」と、警護の者に云う。

警護の者は畏まって後ろへ下がった。

松沢が幕間の横の、城壁の方へと重吾を連れて行く。そこは賑わっている城内の中では忘れ去られたようにひっそりとしている場所だった。秘密の話をするにはうってつけだ。

「お越しくださいまして助かりました」

安堵の声で重吾は云った。

「うむ。上から見ておった。剣介たちの警護のことで来たのであろう？」

「左様で。わたくしには城の役人が、誰が誰やら分かりません。平岡様の手の者が誰だか分かっておりませんと……」

「そうだな……。こっちへ」

松沢がゆっくりと樹の陰に歩み寄り、首を伸ばして棧敷を見やる。重吾も松沢の後ろから棧敷に目をやった。このとき、土俵に目を向けていないのは樹の陰にいるふたりだけだった。

「殿の傍に控えている家臣たちが見えるだろう。殿のすぐ近くが久坂様だ。そしてその隣にいるのが平岡様だ」

ふたりの顔を重吾はじっと見た。久坂は四十がらみのいかにも強者といった面立ちをしている。かたや平岡は久坂よりもいくぶん若く、学者のような顔だった。全く違う顔だが、反目し合っているせいか、どちらも同じようにその表情は険しかった。

「平岡派の主立った者はこっちだ」と云い、松沢が踵を返す。そのまま松沢は城壁沿いに櫓へと向かった。松沢に歩調を合わせ、重吾もあとに続いた。

「櫓の前にいるふたりの警護がそうだ」

立ち止まって云う松沢の視線を追い、重吾もふたりの警護を見やった。これといった特徴はない。しかし、その顔はしっかりと覚えられた。

「他には……」と重吾が訊くと、松沢はそこから見える平岡派の者を顎で指し示した。

「あの三人の他にあと四、五人はいるようなのだが、よく分かっていない。疑われる者たちは童力士から遠ざけるために城の外の警備をさせているが、櫓にいるふたりが久坂様を問い質した者たちだ。おそらく平岡様の意を受けてのことだったのだろう」

重吾はもう一度、櫓にいる二人に目を這わせた。平岡が自ら手を下すことはないだろうから、下すとしたらこの二人の公算が大きい。

「それにだ……ことを起こすのが城の中の者とは限らない」

「とおっしゃいますと……」

「金で人を雇うかもしれん。市中の浪人、ごろつき、そういった類の者だ」

それは十分に考えられることだった。あとで消してしまえば証拠は残らない。

「そうなるはやっかいですね」

「城の中は久坂様が厳重に警備なさっているから、そのような者は侵入できないだろうが、市中は無理だ。久坂様とも話したのだが、城の者であれ浪人であれ、襲うとしたら城の外だろうな」

松沢がゆっくりと振り返り、歩み始めた。棧敷へ戻るのだろう。重吾も付き従った。

「まあ、とにかく、奴らも童角力の最中は大人しくしているだろう、これほどの目があるのだから。しかし、用心に越したことはない。怪しい奴がいたら儂に報せてくれ。警護の者には儂から云っておく、これこれの者が来たら呼んでくれと」

松沢はそのまま棧敷へと戻っていった。その背中を目で追いながら、重吾は城郭をもう一回りしようと思った。松沢が顎で指し示した三人をよく見ておきたかった。

三人の顔を覚え、重吾が棧敷の反対側へ様子を見に行くと、辺りにいる浪人者の顔はどれもこれも怪しく見えた。何かを企んでいるような顔をしている。これでは多すぎてどうにもならないと思い、重吾は一回りしただけで、亀吉たちのいるところへ戻った。ちょうど控えの幕間から正吉が出てきたところだった。正吉にはまだ緊張が窺えた。

「正吉！ 負けるな！」と、亀吉が声を張り上げる。お静までもが大きな声を出しており、重吾は妻のそんな姿を初めて見た。重吾は何だか嬉しくなった。

対戦相手は正吉よりも背が低く、痩せている正吉よりもさらに細かった。初めから戦意を喪失しており、青い顔をしている。勝負の結果は取る前から見えていた。案の定、正吉が一押しすると、相手の童力士はよろけて尻をついた。

「いいぞ、正吉！」

亀吉が重吾に満面の笑みを見せる。重吾も喜んだ。これで正吉も少しは堅さがほぐれるだろう。

正吉が幕間に引き返すと、次に出てきたのは剣介だった。剣介は落ち着き払っていた。

「あれが剣介様だ」と重吾は亀吉に教えてやった。ふたりがともに重吾の元で角力の稽古をしていたのは知っていたが、亀吉は剣介を見たことがなかった。

「あれがそうか……。なかなかいい躰をしているな。だが、正吉の敵ではない。そうだろう？ 重吾さん。正吉が何度も負かしたそうじゃないか」

「そうだな……」

重吾は曖昧な物言いをした。もしふたりが対戦したら、十中八九、剣介が勝つだろう。土俵の剣介は、正吉に全く歯が立たなかった頃の剣介ではなかった。短い角力なら正吉にも勝機はあるが、角力が長くなってくると体力に差があるだけに、剣介に分があった。

剣介の勝負もあつという間について。剣介の豪快な投げに相手は為す術なく転がされ、何が起こったのかも分からないかのように、呆然として動けないでいる。

「強いな……」

亀吉が驚きの声を漏らす。お静も目を丸くしていた。

「あそこまで強くすることはなかったのではありませんか」と、口を尖らせる。

「おれが強くなったんじゃない。本人の力で強くなったんだ」

「それはそうでしょうが……」

お静は尚も納得しかねる顔をしていた。それは亀吉夫婦へ向けた詫びだと重吾は思った。亀吉たちに代わって非難しているに違いない。

「正吉は勝てるかな」

弱気な声を出す亀吉に、重吾は複雑な気持ちを持った。どちらかが先に負けてくれればいい、と思った。そうならばふたりは対戦しなくて済む。しかし、やはりどちらにも負けて欲しくはなかった。出来ればふたりとも勝ち残って、最後の最後に雌雄を決して欲しいものだ。

あとの取り組みが続く中、重吾は城内に異変がないか、もう一度見て回った。正吉と剣介以外の取り組みを見ても仕方がない。他にやるべきことがある。土俵の周りをぐるりと廻り、浪人者を注視する。控えの幕間に近づき、怪しい奴がいらないか確認する。櫓の方へ歩き、例のふたりの警護に変わったところがないか観察する。が、特段、何もなかった。

本当にこのあと何かが起こるのだろうか——重吾はそんな気がしてきた。童角力を楽しんでいる人々の喜びに満ちた笑顔と、無惨に殺されてしまう童力士の姿との画が重吾の中でどうしても結びつかなかった。この平和を乱す魔の手が迫っているとは思えないし、思いたくなかった。

昼が過ぎ、陽が少しだけ傾き始めた。重吾が見回りから戻ってくると、亀吉はすっかり酔っていた。勝ち進んでいる正吉に上機嫌で、村の人たちと、前祝いだ、と云っては祝杯を挙げている。重吾も付き合わされたが、口を湿らす程度にしておいた。そのわけが分かっているから、亀吉も無理強いはしなかった。

土俵に正吉が登場する。

「次を勝てばいよいよだな」と、酒臭い息を吐きかけて亀吉が云う。

残り四人の中に、先に剣介が勝ち残った。次を勝てば正吉もその中に入る。そして剣介との対戦が決まっている。これまで何人もの童力士と戦い、二人のどちらも負けなくてよかったが、最後の最後に対戦するという重吾の望みは絶たれた。

「そうになってしまったな……」

今度の相手は今までのどの童力士よりも強かった。正吉と同程度で、重吾も亀吉も、そして周りにいる村人も冷や冷やの思いで声援を送った。

正吉は勝った。不得手な長い角力になってしまったが、何とか勝つことが出来た。しかし、体力を使い果たし、肩で息をしていた。次の剣介との勝負に際し、休む時間が充分になかった。それが正吉の不運だった。土俵で剣介に相對する段になっても、正吉から疲れは抜けていなかった。

「これでは不公平ではないか。正吉をもう少し休ませてあげないと」

亀吉がいきり立って云うと、村の人たちも、そうだそうだ、と口にする。

「仕方がないだろう、順番なのだから」

重吾の言葉に、誰かの後ろからの声があった。

「重吾さんは所詮、侍の味方なんだな」

重吾は振り返れなかった。分かってもらえない悔しい思いと、自分でもそうかもしれないと認める気持ちがあった。重吾の周りだけに沈黙が襲いかかる。しかし、その沈黙はすぐに破られた。

軍配が返った。歓声が沸き上がり、がつんとふたつの躰がぶつかる。剣介がしゃにむに前に出る。一旦土俵際まで押し込められた正吉が次第に押し返す。四つに組んだひとつの塊が、押し合いを続ける。ときに投げを打ち合い、踏ん張ってはまた前後に押し合い、動きを止める。息を整え、剣介が正吉を吊り上げようとした。そうはさせじと、正吉が腰を落とす。稽古では何度も吊り上げられた正吉だったが何とか踏ん張った。剣介が続けざまに投げを仕掛け、正吉は防戦一方になった。剣介の腕の力は人並み外れて強い。おまけに先の角力の疲れも残っていて、正吉は完全に息が上がっていた。二番続いた長い角力に、正吉の体力は失われてしまい、残っているのは気力だけだった。それは剣介も同じだった。休んでいられた分だけ剣介の方に力が残っていたかもしれないが、剣介も見ることから疲れ切っていた。互いの隙を窺っているときだった、剣介が不意に投げを打った。これで決まったかと重吾は思った。だが、正吉は堪えた。そして剣介の体勢が整う前にぐっと押した。剣介は体勢を崩されたまま、まだ正吉を投げようとし、そして腕の力だけで正吉を投げた。正吉に余力があれば残せただろうが、正吉にそんなものはなかった。正吉の躰が土俵にごろんと転がった。

一斉に歓声が上がる。希代の好勝負に、角力を見ていた全ての人から賞賛の言葉が飛び交う。棧敷の殿も満足そうに微笑まれ、松沢は飛び上がりそうなくらいに喜んでいた。亀吉たちは呆然としていたが、周りからの賞賛の声に、笑顔を見せた。負けはしたが、正吉は誇らしい角力を取ってくれた。そのことがよほど嬉しかったのだろう、亀吉が正吉に向かった吠えた。

「正吉！ よくやった！ 帰ったら飯を腹一杯食わせてやるからな！」

亀吉の言葉にどっと笑いが起こり、亀吉の妻が恥ずかしそうに亀吉を諫めて座らせる。

重吾は剣介の肩を見ていた。無理な姿勢で投げを打ったために痛めてしまったようだ。次は最後だというのに、あれでは満足な角力は取れないだろう。

そして、最後の取り組みは重吾が危惧したとおりになった。痛めてしまった右肩が動かず、剣介はいいところなく敗れてしまった。敗れてしまったが、剣介に悔しさは見られなかった。むしろ精一杯やったという満足感に包まれているようだった。微かな笑みを浮かべ、剣介は控えの幕間に消えていった。

童角力は終わった。

重吾は気を引き締めた。

「まだ帰らないくださいよ」と、満足感に浸っている黒谷村の人たちに念を押す。

控えの幕間にいくと、松沢から話を聞いていたのだろう、警護の者は名前を告げるだけで重吾を通してくれた。中はがらんとしていた。勝ち残っていた十人ほどの童力士が着替えをしており、その中には正吉も剣介もいた。ふたりとも入ってきた重吾に気がつき、走り寄ってきた。

「いい角力だったぞ」と、重吾はふたりに微笑みかけた。

「前の勝負が長引かなければ剣介様にも勝てたんだけどな。警戒しすぎて、思いの外、長引いてしまった」と、正吉がうそぶく。

「それが作戦だったんですよ。二番続けて勝負が長引けばわたしに有利ですから。そうでなければ正吉殿には勝てなかったかもしれません」

「最後の勝負は残念だった。肩さえまともだったなら勝っていたかもしれないな」

重吾の言葉に、剣介は笑って首を振った。

「正吉さんとの角力ですっかり体力を使い果たしてしまいましたから、肩がまともだったとしても勝てなかったでしょう。正吉さんがもう少し早く負けてくれていたら勝てたかもしれませんが」

剣介の軽口に三人は笑った。

そこへ松沢もやってきた。

「二人とも頑張ったな。嬉しい知らせがあるぞ」

剣介と正吉が顔を見合わせる。

「なに？」と、期待に胸を膨らませている。

「うむ。殿がふたりに褒美をくださることになった」

剣介も正吉も飛び跳ねて喜んだ。その報せは重吾にも喜ばしいことではあったが、同時に有り難くない報せでもあった。平岡の云う崇りに一歩近づいた気がする。

松沢も同じ思いだったようだ、重吾に歩み寄って声を掛けた。

「あとのことはよろしく頼む。儂は公務があるからまだ城を離れられない」

「承知しております。お任せください」

松沢は頷き、剣介たちに向き直った。

「表御殿へ案内するからついて参れ」

松沢はもうひとり、剣介を負かした童力士にも褒美がもらえるからと声を掛け、三人を連れて幕間を出て行った。重吾もついて行きたかったが、それは許されない。剣介と正吉が戻ってくるのを黒谷村のみんなと待っているしかなかった。

辺りはすっかり人がいなくなっていた。ぽつんと村の人たちだけが残っている。

「正吉はどうしたんです？」

ひとりで戻ってきた重吾を訝しがって亀吉が訊いた。

「喜んでください。正吉は褒美をもらえることになりました。いま、表御殿へ入ったところですから待っていきましょう」

重吾の言葉を聞くやいなや、亀吉が泣き出した。くしゃくしゃのその顔があまりひどくて、みんなが笑った。

「剣介様ももらえたのでしょうか？」とお静が訊く。

「ああ。ふたりしてもらえた」

「二人とももらえるとは、重吾さんの教えがよほどよかったようだな。来年こそは是非、儂の息子に稽古をつけて欲しいものだ」

村人のひとりが云うと、すぐに別の村人が話をまぜかえした。

「お前は息子の歳も知らないのか。今年十二歳だから来年は出られないじゃないか」

「そうだった」と村人が頭を搔くと、またどっと笑いが起こった。

来年の童角力に思いを馳せながら、村人たちの話は続いた。

しばらく待っていると、警護のものに送られて正吉が戻ってきた。ふたり連れだっていたが、正吉の隣にいたのは剣介ではなく、剣介を負かした童力士だった。その子供は待っている親の元へと駆けていった。城内に残っているのは黒谷村の人たちだけになった。

「剣介様はどうしたんだ？ 一緒じゃなかったのか？」

「一緒だったよ。でも、特別のご褒美があるんだって」

「特別のご褒美？」と、亀吉が口を挟む。

「うん。お殿様が直々にお渡しになるとかで、奥御殿へ行った」

「それじゃ、お前はお殿様にお目通りができなかったのか？」

「偉いお役人に誉められただけだったよ。お目通りができなくて残念だ。だけど、これ」と云って正吉が紙を差し出した。それは褒美の目録だった。嬉しそうに亀吉が受け取る。

「これこれ。これを待っていた。でかしたぞ、正吉。しかし……特別の褒美とは何だろうな？」

「知らないよ、そんなの」

正吉が云うと、亀吉はその答えを重吾に求めた。重吾も知るわけがない。

「何かは分かりませんが、もう少し待っていきましょう。松沢様の屋敷まで送り届けることになっておりますから」

そこへ警護の者が不審の顔でやってきた。

「何をしておる。さっさと帰らぬか」

「童力士を待っております」

「それなら城門の外で待っている。いつまでも城の中をうろつくな」

追い立てられるようにして重吾たちが城門の外に出ると、すぐに城門が閉じられた。

「偉そうにしやがって……」と、村人のひとりが文句を垂れたが、重吾はこの方がよかったのかもしれないと思った。城の中から部外者がいなくなれば、怪しい奴が侵入してきてもすぐに分かるはずだ。待っていれば警護の者が剣介を連れてきてくれるだろう。

重吾たちは待った。今日の童角力が話題になり、ああしておけばよかった、こうしておけばよかったと、悔やむ声がある。運がなかったのだと嘆く声がある。褒美をもらえたからいいではないかと宥める声がある。話題は来年の童角力に変わり、いつしか天気や作付けの話になり、留めなく、漫然とした話が続いた。それでも剣介は戻ってこなかった。

遅い。

遅すぎる。

顔には出していないものの、村の人たちの苛々が伝わってくる。この人たちにとって剣介は何の関係もない存在だ。いつまでも待たせておくわけにはいかないし、それに特別の褒美とはいえ、時間がかかりすぎている。それとも、それだけ時間のかかる褒美なのだろうか。

「お願いでございます」と云い、重吾は城門を叩いた。

少しだけ城門が開き、警護の者が半分だけ顔を覗かせる。

「何だ、まだいたのか」

「申し訳ございません。ですが、童力士がひとりまだ戻ってきておりません」

「なに？」と、警護の者は驚いた。

「剣介様です、松沢様の甥御の」

「松沢様の……ああ、そういえば童角力に出ていたそうだな。待っておれ、捜してくる」

城門が閉じられ、走り去る足音がした。村のみんなが、やれやれといった顔をする。

しばらく待っていると警護の者が戻ってきた。城門がゆっくりと動き、今度は人ひとり通れるだけの幅が開いた。姿を見せたのは警護の者ではなく松沢だった。松沢が剣介の遅れの理由を説明してくれると重吾は思ったが、それは違った。

「剣介が戻ってきていないとはどういうことだ？」

松沢の物言いには棘があった。眉根を寄せ、険しい顔をしている。

「わたくしにもよく分からないのです。ここでこうしてずっと待っていたのですが、未だお戻りにならなくて……。何かで時間がかかっているのでしょうか？」

「ここでずっと待っていたのか？」

「ええ」

「妙だな……。剣介はとっくに奥御殿を出たということだが……。迷子にでもなったかな、城の中は広いからな」

松沢が弱々しい笑みを浮かべる。それは今にも崩れそうだった。

重吾は御殿の中を捜したかった。重吾の身分では許されないが、松沢と一緒にいれば可能だろう。しかし、一方では早く黒谷村に正吉たちを送り届けたいとも思っていた。人数は揃っているが、女子供と酔っぱらいだけで、人攫いに化けた何者かに襲われたらひとたまりもない。

「わたくしはどうすれば……」と、松沢の指示を仰ぐ。

「そうだな……。とにかく、この者たちをいつまでも待たせておくわけにはいかないから、堀田、村まで送ってやれ」と、松沢が亀吉に目を向ける。

迷っていた重吾の心は決まった。

「それではそうさせていただきます。送り次第、すぐに引き返してきますので」

「うむ。そうしてくれるか。どうなっているか分からんから、儂の屋敷に來い。儂はこれから城の者と家の者とで城の中を捜すとしよう」

松沢が城の奥へ消えていく。城門が閉じられ、重吾たちは城下の通りを村へと歩いた。薄暮の中、話をする者は誰もいなかった。正吉がもらった褒美の喜びは霧消していた。皆の考えていることは同じだった。剣介の行方が知れない——そのことと、去年の喜作の件を結びつけるのは容易かった。

「剣介様は喜作みたいにならないよね？ 祟りなんてないよね？」

正吉の怯えた声が静寂を破った。

「心配するな。松沢様もおっしゃったとおり、おおかた城で迷子になったのだろう」

正吉に気休めの笑顔を見せる。

しかし、すでに剣介は攫われているかもしれないと重吾は思っていた。

特別の褒美だからといってそれほど時間がかかるわけがない。殿から賜ったあと、剣介はすぐに戻ってくるはずだった。戻ってきていないのだから、途中の何処かで平岡の手の者に捕らえられたのかもしれない。もしそうなら、今頃は城の何処かに隠されているのだろう。松沢が上手く捜し出してくれればいいが、奴らは今夜にでも剣介を殺し、その死体を山に放って獣に食われたように見せかけるかもしれない。重吾は腹が立っていた。奴らに対しても、そして自分自身にも。重吾に、御殿に上がった剣介の身を護れたはずはないのだが、重吾は自分のせいに思えてならなかった。

時間がない。

重吾は道を急いだ。村人も必死についていく。

「重吾さん、松沢様のところに戻りなされ。あとは儂らで大丈夫だろう」

酔っていたはずの亀吉が、いつの間にかしっかりした足取りをしていた。

他の者たちも口々に、早く戻った方がいい、と云う。

村まではまだだいぶあったが、重吾は亀吉たちに頭を下げ、踵を返した。こっちはもう心配がなさそうだ。一刻も早く剣介を捜さねばならない。時間が経てば経つほど剣介の命は危ない。

重吾は疾駆した。

すっかり暗くなった街道を走る。

城下の明かりが見え始めると、重吾は一層、足を速めた。

松沢の屋敷に着く。重吾は息も切れ切れだったが、急いで家人を呼んだ。慌てて飛び出てきた家人の顔は曇っていた。

「何か分かりましたか？」

「何も。城の者と家の者とずっと捜しているのですが、何処にも見あたらないようです。まるで神隠しにあったようで……祟りだという噂がありますが、本当でしょうか？」

怖々と訊く家人に重吾は憤りを覚えた。剣介の心配よりも自分への祟りを恐れているようで、家人の問いを無視した。

「わたくしも城の中を捜したいのですが、取り計らってもらえないでしょうか？」

「そのことですが、人数は足りておりますので、堀田殿には屋敷で待つていただくようにと云いつかっております。ですからこちらで……」と、家人が中へ案内する。

松沢がそういうのであれば仕方がなかった。せめて城門の外で待っていようかとも思ったが、中に入れないのであれば何処で待っていようとさして変わらない。城の者が捜し出してくれるのを願い、重吾は大人しく松沢の座敷で剣介の帰りを待つことにした。

慌ただしく家人たちが出入りする。その度に状況を問い掛けたが、家人の返事は要領を得なかった。誰ひとり、状況を把握していない。重吾はただ待つしかなかった。

そしてひとりの家人が苦悶の表情で、涙を流しながら戻ってきた。何があったのかと、集まっていた他の家人が口々に問う。苦悶の家人が涙を拭き、口を開いた。

「松沢様が亡くなられた……」

集まっていた家人たちは皆、呆然となった。重吾ももちろん耳を疑った。剣介に災いがあるかもしれないとは思っていたが、松沢に何かが起こるなどとは一顧だにもしていなかった。

嘘だ、そんなはずがない、と怒号が飛び交う。

重吾は静かに制した。

「亡くなられたとはどういうことですか？」と、松沢の死を告げた家人に訊く。

「お館様は平岡様の家臣に斬られたのです」

報告する家人が口の端に悔しさを滲ませる。

「どうしてだ！ 何故斬られたんだ！」と、他の家人たちが声を上げる。辺りは一瞬にして殺気立ち、敵討ちだ！ と騒ぐ者もいた。

「お館様は平岡様が剣介様を隠しているとお疑いでした。何処へ隠した、と平岡様に詰め寄られた末、平岡様の、人を小馬鹿にした知らぬ存ぜぬの言い様に激高され、御殿で刀を抜かれてしまったのです。お館様は平岡様を一刀のもとに斬られました。そして……平岡様の家臣に斬られてしまったのです」

報告の家人が涙とともに語ると、他の家人たちも咽び泣いた。重吾の頬にも涙が伝う。

「つきましては、亡骸を引き取りに行かねばなりません」

儂が参る、と家人たちが名乗りを上げる。重吾もその中にいた。悲しみに打ちひしがれながら十人ほどが城の城門へと向かった。

城門の警護に案内され表御殿へと向かう。そこで警護が交代し、御殿の警護の者が家人たちをさらに奥へと案内する。御殿の建物に沿って歩く家人たちの一番後ろに重吾はついていった。そろそろと辺りを窺いながら暗がりに乗じ、その身を床下に隠した。松沢の恩に報いるためにも剣介を捜さねばならない。助けなければならぬ。松沢が死んだ今、せめて剣介には生きていてもらわねばならない。そのためには床下に身を隠して手掛かりを得るしかなかった。

真っ暗な床下を這いながら、家人たちの動きを追う。庭先は仄かに明るい。すると庭先に放っておかれたままの松沢の亡骸があった。亡骸はひとつだけで、平岡の亡骸がないところを見ると既に運び出されたようだ。重吾は床下で手を合わせた。松沢の亡骸は戸板に載せられていた。それを家人たちが持ち上げ、来た道を沈鬱に引き返していく。

さらに重吾は床下を這った。遠くに見える庭先の明かりを頼りに、方角を見失わないように移動した。蜘蛛の巣を払い、瓦礫に手のひらを痛めながら先を目指した。当てはなかった。何処をどう捜していけばいいのか分からなかったが、行く先に何かの手掛かりがあるのを信じ、重吾は床下をひたすら這っていった。

と、人の話し声がした。声を潜めている。詰め所の下に来たのだろう。二人、あるいは三人くらいのぼそぼそとした、いかにも辺りを憚っているようだった。

「大変なことになったな」

「ああ、まさか松沢様があそこまでお怒りになるとは」

「甥御を思っていることだろうが、刀を抜くとは度が過ぎる」

「まあ、平岡様も悪い。松沢様を小馬鹿にしておられたからな」

「それにしても平岡様はとばっちりだったな」

「ああ、気の毒だ。だが、こっちにすればいい風向きになった」

ふふふ、と忍び笑いが聞こえる。どうやら上にいるのは、久坂に与する者のようだ。自分たちの主人にあだなす平岡の死をほくそ笑んでいる。城の重臣が死んだというのに、自分たちの利益を喜んでいる床上の者たちを重吾は嫌悪した。

ひそひそと話す床上の会話は続いた。

「そろそろだな。まったく、嫌になる。今頃は……」

「それを云うな」

「来年は、儂はやらんぞ。誰か他の者に……」

「そうはいくか。儂らの他に誰がやる。嫌な役目だがやるより仕方がない」

「やれやれ。儂も童力士のような褒美が欲しいものだ」

ふふふ、とまた忍び笑いがした。

上の者たちの役目とは何だ？

そろそろ——とは、いったい何のことだ？

重吾は気が急いた。何が起きているのかは分からないが、それが剣介の身に関わっているのは間違いない。剣介はいったい何処にいるのだろう。

床下をさらに奥へと這っていく。

剣介が何処にいるのか、何かの手掛かりがないかと耳を澄ませる。しかし、物音は一切なかった。何の異変も感じられないまま、表御殿の際にやってきてしまった。渡り廊下の先は奥御殿になっている。殿の寝所だ。この先に剣介がいるはずがない。どうやら見つけられないままここまで来てしまったようだ。

静かだった。警護の者や仕えている奥女中がいるはずなのに、奥御殿から人の声がしない。人のいる様子がない。殿はここにはおられないのだろうか——。

引き返そうと思ったが、奇異なものが目に映った。奥御殿の庭先、城壁の近くに掘られたばかりのような穴が見える。距離があり、低い姿勢なので穴の大きさまでは分からないが、掘り返された土の量からするとそれほど大きくはなさそうだ。何のためにあんな所に穴を？

そのときだった。誰もいないと思っていた奥座敷から、何かの咆吼が聞こえた。おぞましくて不快極まる鳴き声だった。

獣か？

咆吼に続き、別の叫び声が上がった。人の声だ。恐怖におののき、絶望に打ちひしがれている。それは子供の声だった。

剣介かもしれない。いや、剣介以外に考えられない。

重吾は床下から飛び出し、奥御殿へと向かった。庭先から座敷に上がる。今の叫び声を聞いて、おっつけ警護の者が駆けつけてくるだろう。見つかるだろうが、それでも構わなかった。何よりもまず、剣介を助けることが先決だ。

座敷には誰もいなかった。何処に行かれたのだろうか、殿はおられないようだが、さっき吠えた獣に、すでに食われてしまったのだろうか。近習たちは何をしているのだろうか。殿の安否も気にかかる。何処かに逃げ出したあとなのだろうか。誰もいないのも妙だったが、警護の者が駆けつけてこないのも妙だった。獣の咆吼が聞こえなかったはずはないと思うのだが――。

またもや獣の声がした。襖の向こうから聞こえる。今度は唸っている声だ。低くて、その声には微かに満足感のようなものが含まれていた。重吾は刀を抜き、襖を開けた。

座敷牢があった。格子に組まれた木枠の中にもぞもぞと動くものがいた。四つん這いになって何かに覆い被さっている。背中を向けていてはっきりしないが、着物を着ていてそれは獣などではなかった。重吾の侵入を感じ取ったのだろうか、それは首をもたげ、ゆっくりと振り返った。人だ。人には違いないが、鬼に見える。白眼で重吾を睨んでいる。髪は乱れ、口元は血に塗れ、着ている白い寝間着が朱に染まっている。その鬼のような化け物が唸りながら立ち上がった。

見たこともない化け物に、重吾は恐怖を覚えた。その足元には……肉の塊があった。人、それも子供の躰だ。この化け物は子供を食っていた。

遅かった。

転がっている肉の塊は剣介に違いなかった。恐怖は怒りへと変じた。

「おのれ、化け物！」

重吾は牢の中に押し入り、化け物を斬り捨てたかった。だが、牢にはしっかりと鉄の鍵が掛けられていた。刀ではどうにもならない。仕方なく、抜いた刀を牢の木枠に突き立てる。仄暗い牢の中に、刃がキラリと光る。何度も何度も突き立てる。だが、いくら手を伸ばしても木枠が邪魔で、化け物には刀の切っ先さえ届かなかった。

化け物が咆吼をあげる。それは耳をつんざくほどの大きさと、重吾は思わず刀を引っ込めた。耳を押さえていないと頭がどうにかなりそうだった。化け物が咆吼をやめると、重吾はそろりそろりと牢の周りを動いた。隙を窺って刀を突き立てようとするが、化け物は重吾の動きから目を離さない。睨み合ったまま、重吾は右へ左へ動いた。何も出来ないまま時間だけが過ぎていく。激高が収まり、落ち着きを取り戻した重吾は、化け物の牢に囚われている状況が腑に落ちなかった。

城の者たちが化け物を捕らえ、牢に放り込んだのだろうが、どうして剣介は中にいたのだろうか。迷い込んだのだろうか。褒美をもらった帰り、道を迷って奥御殿に来てしまい、牢の化け物に捕まった……。いや、そんなはずはない。牢には鍵がかけられている。剣介が間違っ入ることはない。ならば何故剣介は……

そのとき、背中ではどたどたと走り回る音がした。

渡り廊下辺りからだろうか、どうやらやっと思護の者が来たようだ。

化け物にも足音が聞こえているようだ。迫り来る足音に狼狽している。

今だ！ 有り難いことに、化け物が重吾の方へ足を踏み出した。

重吾は腕を目一杯伸ばし、刀を突き立てた。隙を見せた化け物の右胸に刀が刺さり、鮮血がほとばしる。真っ赤な血だった。生意気にも、この化け物の血は人と同じ色をしていた。刀を引き、重吾はもう一度突き立てた。今度は化け物の腹に刺さった。腹からも血が流れる。しかし、化け物に両の手のひらで刀を挟まれ、重吾は刀を引けなくなってしまった。押しても無駄だった。刀を奪われまいと、必死で刀を持つ手に力を込める。

「くせ者！ 何処から入った！」

城の者がやってきた。三人だ。重吾を見るやいなや刀を抜き、切っ先を向ける。

「怪しいものではございません。あとで罰はいかようにも受けます。今はこの化け物を退治することが先でございます。あっ」

城の者との話に気を取られ、重吾は化け物に刀を叩き落とされてしまった。化け物が素早く刀を拾いあげる。その刀で刺してくると思い、重吾は格子の木枠から飛び退いた。だが、化け物は大人しくしていた。胸と腹から血を流し、反撃の力を失ってしまったようだ。

「何てことをしてくれたんだ！」

三人の真ん中にいる若い侍が怒声を浴びせる。

「この化け物が子供を、おそらく松沢様の甥御である剣介様を食ったのでございます。ですからこうして退治していたのです。こんな恐ろしい化け物を捕まえたのに、どうして殺しておかなかったのですか？」

「お前などが知る必要はない」

いかにも役人的な、人を見下した高飛車な物言いだった。

三人が間合いを詰める。この場で斬り捨てるつもりようだ。重吾は腰の小刀を抜いた。

「わたしよりもこの化け物を退治するのが先でしょう？」

「殺されるのはお前だけだ。その理由をお前が知る必要はない」と、重吾をさげすむ目で見ると。

こいつらは何を隠しているのだろう。何故、この化け物を生かしておくのだろう。

三人の後ろ、襖から黒い影がずっと現れた。

「きさまは誰だ？」と、低い声で重吾に訊く。

重吾は見覚えがあった。童角力の折り、殿の傍に控えていた重臣で、童角力の一切を取り仕切っている久坂がそこにいた。三人の前に立ち、斬り捨てようと逸る三人を抑える。

「黒谷村の堀田重吾と申します」

「堀田？ ああ、松沢殿の甥御に角力の稽古をつけていたとかいう……。いい師匠に教えてもらっているから上達が早い、と云われていたが、きさまのことだったか」

「いい師匠だったかはともかく、剣介様に角力を教えておりました」

「強くなったのが不幸だったな。弱いままだったなら食われることはなかったのに」

「それはどういうことでしょうか？」

重吾の問いに久坂は答えなかった。

「堀田、きさまひとりでここへ来たのか？ 仲間はい？」

「他には誰もおりません。ひとりでございますが……」

「ならば牢の中を見たものはきさまだけなんだな？」と、久坂が念を押して訊く。

化け物の存在を知られてはまずいようだ。久坂はそのことだけを恐れているらしい。

今度こそ殺されると重吾は思った。久坂が三人の後ろに下がった。殺せという合図なのだろう、三人が再び刀を構える。殺意をみなぎらせ、重吾に迫ってくる。重吾は小刀を前に突き出し、ひとりひとりに目を這わせた。三対一、久坂を入れれば四対一、腕に覚えのある重吾だったが、死を覚悟した。何らかの秘密を守るために自分は殺される――。

「待て……」

弱々しい声が重吾の背中から聞こえた。

「待て……」

重吾の背中には牢しかない。ということは、あの化け物が喋っているのか？

重吾は後ろを振り返りたかった。しかし、今、振り返ると久坂の配下の者に斬られてしまう。「皆……刀を下ろせ」と、後ろの声が命じる。戸惑いを覚えながらも、久坂の配下の者たちが刀を下ろした。床に膝をつき、恭順している。化け物の命令に従っている――どういうことだ？そして久坂までもが床に膝をつき、畏まっている。

化け物の正体はまさか――

重吾は振り返った。その顔も童角力の折り、重吾は見ていた。棧敷から童力士たちを熱心に見ていた殿だ。鬼のような姿は何処にもなかった。ただ着ているものは同じで、口の周りには血が滴っていた。そして先ほどの化け物と殿が同一である証拠に、殿の右の胸と腹には深い傷があった。

久坂が牢の木柱ににじり寄る。

「お怪我はいかがですか？ 医者を呼びますのでもうしばらくご辛抱を」

久坂が配下の者に顔を向け、顎をしゃくると、ひとりが座敷を駆け出していった。

「今、鍵をお開けいたします」と、別の配下の者が手を伸ばした。

「開けるな……」

「しかし、それでは傷の治療が出来ません」

久坂が配下の者に鍵を開けるように促す。

「開けてはならん」

息も絶え絶えだった殿が牢の扉に近づき、重吾から奪った刀を木枠の隙間から突き立てる。久坂も配下の者も後ろへ下がった。

「開けてはならん……このままにしておいてくれ」

殿は泣いていた。惚けたように滂沱の涙を落としている。

化け物の正体は殿だった。そしてその殿が今は泣いている。重吾は何が何やら訳の分からないことだらけだった。

「その者……堀田とか申したな」

「ははっ」

重吾も床に膝を揃えた。奇妙な思いがしていた。化け物だと思い、斬りつけた相手に畏まっている。さっき見た化け物は幻だったのだろうか。

「済まぬことをした」と、殿が頭を垂れる。

剣介のことだ。再び重吾の心に怒りが湧き上がってきた。赦せない。いかに殿とはいえ、人のすることではない。悪鬼の所行だ。なじりたかった。悪態を吐きたかった。だが——殿を相手にそんなことが出来るはずはなかった。

「何故、剣介様を食ったのですか？」と、少しばかりの非難を込めていう。

殿の顔が悔悟に歪む。

「儂は……病気なのじゃ」

「病気？ でございますか」

「そうじゃ。心の病。儂は年に一度、自分を鬼とってしまうのじゃ。そして鬼のように振る舞ってしまう……」

自分を鬼とってそのように振る舞ってしまう——それは重吾が見た光景そのままだった。重吾と戦った化け物はまさに鬼だった。牢の中に捕らわれていなければやられていたかもしれない。

「赦されないことだとは分かっていたが……鬼に変わってしまった自分を鎮めるには肉を食らうしかなかった」

「それで毎年、同じことが起こってたのですね。去年も一昨年も、獣が食っていたのではなく、殿が食っておられた……」

喜作も去年この場で殿に食い殺され、獣の仕業に見せるために、城の者によってその死体は山に棄てられた。今年も剣介の死体を何処ぞの山へ棄てるつもりだったのだろう。いや、庭先の穴、あそこに埋めるつもりだったのではないか。百姓の子と違って剣介の死体が見つかったなら、松沢を先頭に大がかりな捜査が行われるだろうし、平岡からの追及も厳しくなっていただろう。もはやどちらも生きてはいないが——。

「毎年、この時期になると、儂は自分が恐ろしくてならなかった。今年も誰かを殺し、食ってしまう——そんな自分が嫌で堪らなかった。儂の中には恐ろしい血が流れている。鬼の血だ。人と変わらない色の血だが、その血が年に一度、煮えたぎり、自分が自分でなくなってしまうのだ。人の心をなくした儂は、もはや自分をどうにも抑えられなかった……鬼と化し、翌朝目覚めるまで人に戻ることはなかった」

声が詰まり、殿の話が途切れた。殿の悲痛の告白に、配下の三人は咽び泣いていた。久坂も目に涙を浮かべている。

「儂がこうなってしまったのは父のせいだ。儂の父は冷徹で非情のお人だった。目的のためには手段を選ばず、残虐の限りを尽くされた。そんな父を幼い頃から見ていた儂は、父と同じように、鬼のような心を持ってしまわないかと恐れた。十歳の時、最初の兆候が現れた。童角力を見ていた儂は血が騒ぎ、無性に角力が取りたくなった。強い童力士と対戦したかった。しかし、儂が童角力に参加するわけにはいかない。だから、勝ち残った童力士を奥御殿に呼び、庭先で角力を取った。相手の童力士がわざと負けたのが悔しくて、儂はそいつに噛みついた。血が出るまで噛んだ。家臣たちに引き離された儂はそのとき、悔しい気持ちなど少しも残っていなかった。えもいわれぬ恍惚感だけがあった。それが異常なのは分かっていた。人に噛みついて喜びを得る——何と人非人な気質なのだろうと思った。そんな自分の本質を知られるのが怖くて、儂は必死に自分を抑えた。その甲斐があってそれからしばらくは、人を噛むような所行はしなくなった。だが、儂の本質を目覚めさせる出来事が起こってしまった。戦だ。十八のとき、儂は初陣に出た。血の臭いが儂を目覚めさせ、気がつくとも儂は敵兵の首に噛みついていて。傍にいた久坂に異常を察せられ、儂は全てを話した。それから久坂は儂の異常な所行を隠してくれた。儂は童角力を見なくなった。その日は病ということにして奥で臥せていた。鹿や猪の生肉を食い、鬼になりそうな自分をどうにか抑えていた。しかしそれは何年も続かなかった。ある年、儂は鹿や猪の肉では飽き足らなくなり、ついに奥女中に噛みついてしまった。そして父の知るところとなり、儂は座敷牢に入れられた。鬼と罵られ、成敗されるはずだった。そこを久坂が助けてくれた……」

そうだったな、と殿が久坂を見る。久坂は小さく頷いた。

「生肉を食べば元の人間に戻る——そのことを父に教えた。父は信じなかったが、座敷牢からは出してくれた。そして次の年、儂はまたおかしくなった。久坂の言葉を信じていなかった父だったが、本当にそんなことが起こるのかどうかを確かめようとして、生け贄だけは用意してくれた。捕まえておいた敵兵だ。その頃は毎年戦が行われていたから、敵兵には事欠かなかった。事の次第を見届け、儂の真実を知った父は、儂をすぐには殺さなかったものの、次の戦の折り、密かに家臣に命じて儂を殺そうとしたのだ。そこを助けてくれたのも久坂だった。父に殺される——儂は殺されても構わなかった。むしろ死を願っていた。こんな呪われた躰で生きていくくらいなら、いっそ死にたかった。しかし、その前にやっておくことがあった。それは父を殺すことだ。父はこの国を平定し、平和が訪れたというのに、すでに隣国への侵略を考えていた。父の頭の中にあったのは戦のことだけだ。戦がしたくてたまらないのだ。父は儂を化け物と罵ったが、父の方がよほど化け物だ、鬼だ。酔って寝ている父を殺すのは簡単だった。巷間では、父は急の病となっているが、儂がこの手で刺し殺した。あっけなく死んだ父を見ているうちに、儂は愕然となった。実の父をこの手で殺したというのに、悔悟の念がまるでなかったのだ。むしろ喜びがあった。儂は自分が本当に鬼になってしまったんだと思った。生きていてはいけないと思った。儂は死を選んだ。そこをまたしても久坂に止められた……」

殿が苦悶の顔をする。あのとき死なせてくれていれば、とでも云いたそうに久坂を見やる。言い訳するように久坂が話を始めた。

「あのとき殿に死なれていたら、この国はまた混乱が始まっていたでしょう。どうしても殿には生きていてもらわねばならなかったのです」

「それは分かっているが……」

「混乱に乗じ、他国が侵略してきたかもしれないのです。どうあっても生きていてもらわねばならなかったのです」

「しかしな……生きてきたばかりに、そのあと僕は子供を殺してしまった。いたいけな幼い子供を食ってしまった……」

殿の目から悔恨の涙が零れ落ちる。

「遺憾ではございますが、致し方なかったことではございます」

「久坂にそう云われ、僕も無理から自らを納得させようとしてきた。僕の使命、父の所行を懺悔し、この国の民に幸せをもたらすためには、犠牲はやむを得ないのかもしれないと思っていた。だから、鬼と化した躰から人に戻るために子供の肉を食った。しかしだ……それでは僕は父と同じではないか。いや、父より始末が悪い、実際に人を食ったのだからな。何よりも……これは久坂にも初めて打ち明けるが……僕は食う童力士選んでいる際、心の奥底に密かな喜びがあったのだ。好みの旨そうな肉を前にして迷っているのが愉しかった……。こんな鬼となってしまった僕がこの国を統べていいはずがない」

「ですが、年にひとり子供が死ぬだけではありませんか。それでこの国は平和に保たれているのでございます。殿のお辛いお気持ちは重々承知いたしております。そこを曲げてお願い致します、なにとぞお考え直しを。何かと嗅ぎ廻っていた平岡殿は何もご存じありませんでしたし、それにもはやこの世におられません」

「平岡が……死んだか」

「はい。これで童角力を疑う者はいなくなりました。そして、いままでの偽装は全て上手くいっているのですから、殿のお身体のごことが外に漏れることはございません。ただ……」

久坂が重吾に顔を向ける。憎しみこそこもっていないものの、その顔には嫌悪が浮かんでいた。

「その者のお陰で僕は目が覚めたのだ。久坂、要らぬことを考えるなよ。堀田、僕はたぎっていた血を流したために、元の自分に戻ることが出来た。いつもなら朝まで眠りこけていたのだが……。僕が寝ている間に片付けられ、起きた際に子供の骸はなかった。だから夢のような気がしていた。だが夢ではなかった。僕が食った童力士の縁者が現れたのだ、命をかけて護ろうとする縁者が。童力士にも縁者がいた、そのことに僕は初めて気がついた。お主のお陰だ、礼を云うぞ」

殿の言葉に、重吾は深々と頭を下げた。内心は複雑だった。鬼となって剣介を食ったのだ、赦すことは出来ない。しかし、先の殿のせいで精神をおかしくし、自分を鬼と思い込んでしまった殿に同情する気持ちも少なからずあった。

「こんな僕は……生きてはいけないのだ」と、殿がぽつりと漏らす。

「何をおっしゃいますか、殿！ 先ほども申し上げましたとおり……」

久坂の言葉に、殿はふっと弱い笑みを浮かべた。

「やはり間違っている。僕は子供を食ったのだ、人として赦されることではない。まさに鬼の所行だ。このままおめおめと生きながらえることなど、僕には耐えられない」

「殿がお隠れになられたらこの国はまた乱れてしまいます。殿がおられればこそ平和が保たれているのです。それをどうお考えですか？」

久坂がにじり寄り、牢の格子に手をかける。必死の形相で、殿に思い留まるよう訴える。

「一時的な混乱は生じるかもしれないが、それを鎮めるのがお前の役目だ。お前なら出来る。いや、久坂、お前にしかできないだろう」

「ですが、殿にはお世継ぎがおられないではありませんか。君主がいなければ国は安定しません」

「確かに、儂には子がいない。それは儂の中に流れている血を恐れていたからだ。儂のような子が生まれてはならないと思ったから、儂は子をなさなかった。この血は絶たなければならないのだ。そうはいても、昔のように国が分かれないうちには君主が必要だろう。だから……お前がやれ」

「はあ？」

久坂が驚きと戸惑いの混じった声を漏らし、今の言葉を聞いたかと問い掛けるように、周りには配下の者に目を向ける。配下の者たちは自分の耳を疑っているようだった。殿の言葉を本当に聞いたのかどうか、信じられない顔をしている。

重吾も信じられなかった。君主が家臣に国を譲る話など聞いたことがない。

「久坂、お前しかいないのだ、やってくれるな？」

「ですが……人心がわたくしにつきますでしょうか。この状況を考えれば、誰しものが、わたくしが謀反を起こしたと見なすでしょう。逆臣と思われてしまったわたくしに、国をまとめることなど出来るはずがありません。ですから、殿には何としても生きて……」

「お前が謀反を起こすような人間でないことは皆が承知している。そんなことは心配するな。儂は気が触れて自害した、それだけのことだ。誰もお前を疑ったりしないだろう」

「ですが……古今、家臣が君主を殺めた例は枚挙に暇がありません」

「心配性だな。そんなに心配しなくとも、そこに証人がおるではないか」

殿の目が重吾に向けられる。

「わたしでございますか？」

重吾は狼狽えた。そんな重要な役目を担わされるとは思いもしなかった。不審の者として斬り捨てられてもおかしくなかったのに、いまや国の行く末の鍵になっている。

「堀田、お主はずっと話を聞いていて、久坂に私心がないことを知っておるな？」

「はい」

「万が一、久坂を疑う者がいたとしても、久坂のために証言してくれるな？」

「はい」

重吾に否はなかった。重吾とて国の平和を願っている。国が乱れば出世の機会はあるだろうが、自ら混乱を起こしたくはない。

「これで心配することはないだろう、久坂」

「はあ……」

久坂は尚も苦慮していた。

「ですが……この者を生かしておきますと、殿のご病気のことが外に漏れてしまうかもしれません。殿の名誉のためにも口を塞がねば……」

「ならぬ！」

殿の叱責は厳しかった。久坂が反射的に頭を下げる。

「儂の名誉などどうでもよい。儂は自分を鬼と思いこんで人を食ったのだ、名誉などあるものか。堀田を殺してはならんぞ。己の命を顧みず、童力士を助けようとした忠義の者ではないか。そんな者を口封じのために殺すことなど断じてあってはならぬ。それに……そんなくだらないことは考えるまでもないだろう。そこの堀田があれこれ喋ると思うか？」

「いえ。この者をよく知りませんが……殿の仰せとあれば、従うまでです」

不承不承の印象があった。殿には従うと云ったものの、殿が自害したあと、久坂は自分を始末するかもしれない、と重吾は思った。

「しかと申しつけたぞ」

殿もまた自分が死んだあと、久坂がどう出るかの自信はなさそうだった。久坂をじっと見据えたまま、その目を離さなかった。

渡り廊下を走ってくる足音があった。音は近づき、音の主が奥座敷にやってきた。ふたりいた。久坂の配下の者と初老の医者だった。奥座敷にいた皆の目が医者に注がれる。医者は殿のいる牢に歩み寄ってきて立ち止まった。

「これは……」と、おののきの声を上げる。

医者の視線は床に転がっている剣介の死体を捉えていた。

「儂だ。儂がやったのだ」

医者が訝しげな顔をする。状況が把握できないようだったが、医者は自分の務めを果たそうとした。久坂の配下の者に牢の鍵を開けるよう促す。

「開けてはならん」

「しかし、それでは傷の手当てが出来ません」

「手当などしてもらわなくとも結構だ。それより、源庵殿、いいところに来られた」

殿は医者を見て微笑みを浮かべた。

「いいところ？」

「ああ。源庵殿にも証人になってもらいたい。儂は気が触れてそこの子供を食った。自分を鬼だと思ってしまったのだ。そして……気が触れた儂はこれから自害する」

驚きの顔で医者が殿を見る。

「自害などとんでもないことです。お考えをお改めください」

医者は、どうして止めないのだと久坂を見る。久坂は押し黙ったままだった。

「儂が死んだあと、久坂が儂を殺したと疑う者が出てくるかもしれん。そうではないことを源庵殿に知っておいて欲しいのだ、よろしいな？」

「久坂様が謀反を起こすようなお方でないのはよく存じております。ですが……殿は本当に子供を食われたのですか？」

医者の目が再び剣介の亡骸を捉えていた。おぞましさを顔が歪んでいる。

「本当だ。そのことも久坂がよく知っている。儂は何の罪もない童力士を三人も食い殺した。その前にも敵兵を何人か食った。儂は鬼だ。だから死なねばならないのだ」

「以前の童力士が殺された件も……」

殿の話が本当だと医者も合点がいったようだった。殿を見る医者の目が哀しかった。

「それから……源庵殿にはもうひとつお願いしたいことがある」

「それは何でしょう？」

「そこにいる堀田という侍のことだ。その者を預かってはもらえないだろうか？」

自分の名が出て重吾は驚いた。しかも、預かるという。どういうことだろう。

「預かるとおっしゃいますと……」と、重吾に代わるかのように医者が訊いた。

「この国は農業も商業も盛んになった。少しは民の暮らしの向上に貢献できたかなと自負している。しかし、まだまだ病や怪我に苦しむ者は多い。それなのに医者数は足りているとはいえない。ひとりでも多くの医者が必要だ。どうだ、堀田、お主の考えを何も訊かないで話を進めたが、医者になる気はないか？」

降って湧いたような話に、重吾は面食らった。面食らいながらも殿の真意を考えた。

医者を増やしたいのは事実だろう。しかし、そのために源庵のところに預けるといふことの本意は別にあると重吾は思った。殿は、自分の身を源庵に預ければ久坂が口封じに動くことはないと考えているのだろう。

「これから始めるにはだいぶ歳を食っておりますが、それでもよろしければ……」

「よし。これで決まったな。源庵殿、よろしく頼む」

「承知いたしました」

「これで向後の憂いはなくなった。さてと……」

殿が居住まいを正す。

「儂をひとりにしてくれるか」

久坂が牢に縋り寄り、格子にしがみつく。

「殿！ 今一度お考え直しを！」と絶叫し、涙を流す。

「何を泣いておるか。お前にはこれから大事な仕事があるので、めそめそするでない」

優しく叱りつける殿の目にも涙があった。

「さあ……」と殿が皆を促す。

殿を引き留めることは無理だと悟り、ひとり、またひとりと襖から出て行った。重吾に続き、久坂が襖を閉じる。閉ざされた襖の向こうから声がした。

「堀田、済まなかった。死んで詫びる。赦してくれるか？」

重吾は振り返った。

「赦すも何も……。憎くは思いましたが、それだけのことです。殿の期待に添えるよう立派な医者になってみせます」

「久坂にも済まなかった。童力士を農に食わせるなど、さぞ辛いことであつたろう」

「もったいないお言葉。あのときは……わたしも鬼となっております。鬼にならねば殿のご命令を遂行できませんでした。殿のご命令とはいえ、いたいけな子供を生け贄にしたわたくしにも罪はあります」

「死んではならんぞ、久坂」

「ええ、分かっております。大事な役目がありますから死にはいたしません。死なぬかわりに罪滅ぼしといひましようか、少しでも罪を償うために寺を建立し、犠牲となった童力士の冥福を祈りたいと思います」

「そうしてくれるか。今は久坂だけが頼りだ、あとをよろしく頼む」

「はっ」と、久坂が襖に向かって頭を下げる。

「それから……童角力は来年も続けてくれ。皆が楽しみにしているからな」

「承知いたしました」

「それでは死への旅路につくとしよう」

殿の最期の言葉に、重吾たちは一礼して襖から離れ、配下の者たちがいる奥座敷の外の廊下に正座した。誰もがすすり泣いている。並んで座った重吾に久坂が囁きかけた。

「安心せい、堀田。お主を殺すのはやめた。農とて、もうこれ以上罪を重ねたくはない。国を護るためとはいえ何人も殺してきたが、呵責はあつたのだ。罪悪感に苛まれながらも、己の務めだと言ひ聞かせてきた。もう終わらせたいのだ。だから……医者になる必要はない。今までどおりに暮らしてもいいのだぞ。源庵殿は人手が欲しいだろうが、無理することはない、お前の考えでどうするか決めればいい」

重吾の腹は決まっていた。

「殿の最期のお頼みですし、医者になります。妙な巡り合わせですが、これも運命なのでしょう」

「そうか。源庵殿は喜ばれるだろうな」

重吾は黙って頷いた。

そして皆は静かにそのときを待った。

夜もだいぶ更けたというのに、重吾の家ではお静の元、亀吉や近所の者が集まっていた。平岡と松沢の死に驚き、剣介の行方を聞きたがった。結局見つからなかった——と重吾は嘘を吐いた。久坂との申し合わせで、重吾は剣介を捜しに城内へ入ったもののすぐに摘み出され、城門で報告を待っていたことになっている。だから殿の死も告げるわけにはいかなかった。殿の死は急の病として近いうちに周知されるだろう。剣介の亡骸は予定どおり、奥座敷の庭先の穴に埋められた。これで剣介は永遠に行方不明となった。神隠しにあったと噂が流れることだろう。

沈痛の面持ちで近所の者が帰ると、重吾はお静に向き直り、奥御殿での出来事を話した。お静ならむやみに人に話したりしないし、お静には事実を云っておきたかった。しかし一部だけ、剣介が鬼と化した殿に食われたとは話さなかった。あまりに残酷で、ただ殿に殺されたとだけ話した。お静を怖がらせる必要はない。そしてひよんなことから医者の見習いになることになったと伝えた。お静が目を丸くし、呆然と重吾を見る。

「四十近くになっていまさら見習いもないだろうが……」

重吾はお静の反応を窺った。ようやく落ち着いてきた暮らしがまた変わるのを厭うかもしれないと思った。ましてや、医者とはいえただの見習いに過ぎない、生活はさらに困窮するだろう。

お静は戸惑っていた。

「一度にあまりに多くのことが起きましたものですから……」

「嫌か？」と、重吾は訊いた。お静が嫌だと云っても決意を変えるつもりはなかった。説得すれば分かってくれると思っていた。

「決してそのような。もうお決めになったのでしょうか？ でしたら何も申すことはありません」

お静は、仕方ないといった顔で半分笑っている。

「苦勞をかけるな」

「暮らし向きのことなら何とかありません。これまでは村の子供が相手でしたから無償で書を教えておりましたが、城下の侍や商人の子供でしたら多少なりともお代をいただけるでしょうから」

お静の微笑みに、重吾は気持ちが軽くなった。医者への転身の理由を訊かれなかったことが有り難かった。それでも理由を何も云わないわけにはいかず、城門で医師の源庵に会い、人手が足りないから手伝ってくれないか、と頼まれたとだけ話した。久坂との因縁は話さなかった。これもお静に余計な心配を抱かせるだけだった。

二日後に引っ越しだと告げると、お静はまた目を丸くし、渋い顔を作った。その顔に笑みが浮かんだ。

「それはまた急なことです……荷物は少ないですから、まあ、二日もあれば準備は出来るでしょうし、挨拶も済ませられるでしょう」

引っ越しの朝、近所の人たちが見送りに来てくれた。城下へは歩いてそれほどかからないというのに、どの顔も今生の別れのように今にも泣き出しそうだった。お静も目に涙をためている。

「重吾さんたちが行っちゃうと寂しくなるな。まだ字を全部覚えていないから絶対に行くよ」

必死に涙を堪えている正吉に、お静が優しく微笑む。

見送りに来てくれたひとりひとりの手を取る。

「それでは……」と云い、重吾たちは背を向けた。ときどき振り返りながら城への道を歩く。

重吾は身の回りのものなどを両手に提げていた。お静もひとつだけ小さな荷物を持っていた。

「何だか妙な具合だな」と、重吾がぽつりと呟く。

「何がです？」

「あっという間に暮らしが変わってしまう。望むと望まずに限らず……」

「きっと運命なのでしょう」

「そうなのだろうな」

重吾は松沢や剣介のことを考えていた。運命というにはあまりにも残酷な結末だ。そして、もし殿に選ばれたのが剣介でなかったらどうなっていたらだろうかと考えた。おそらく暮らしが変わることはなかっただろう。源庵が医者の見習いを誰かに求めたとしても、自分が望むことはなかった——重吾はそう思った。ほんのちょっとした選択の違いが大きく違った結果を生む。つくづく妙な具合だ、と重吾は胸中でひとりごちた。

「これから新しい暮らしが始まるのですから、そんな難しい顔をしてはいけませんよ。もっと笑って」

さっきまで泣きそうだった顔に笑みを浮かべ、お静が云う。お静は重吾の背中に回った。

「さあ、さあ」と、嬉しそうに重吾の背中を押す。

路傍の草に朝露が輝き、お静の、よいしょよいしょ、の音が辺りに響いた。

了